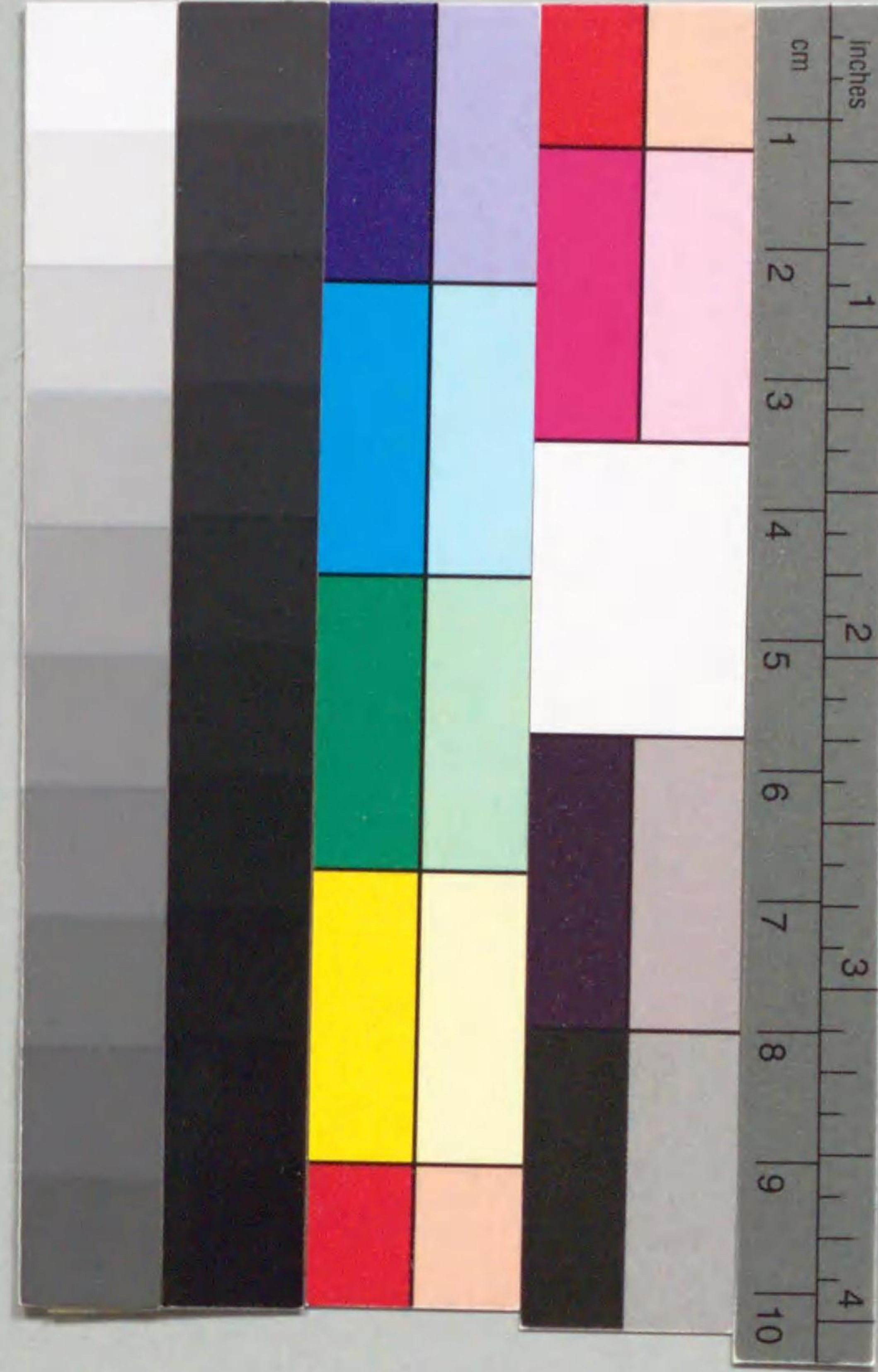


KG276-J1



1200701760952

江戸時川
之代



吉



井上劍花坊著

江戸時代の川柳

一名川柳史

近代日本文化史研究會



總序

廣き意味に於て、歴史は人類發展の跡を明かにせんとするものである。而してその發展の過程を見れば、孰れの民族でも孰れの國民でも、皆それぞれ特異なる生活を營み、特異なる發展をして居ることは言をまたない、同一民族、同一國民に在つても、尙時代によつて、それぞれ特異なる發展を遂げて居るのである。そは一々例證を擧げて論ずるにも及ぶまい。そこで、その各時代を通觀して、はじめてよくその民族、その國民の個性、及びその發展を知ることが出来るのである。試にこれを我國の歴史に徴するも神代の昔より現代に至るまで、各時代それぞれ特異なる世相を呈してゐるが、その間に、自から一貫した或るものがある、日本國民の固有の精神の如きは其尤なるものである。それも時に盛衰消長の差違あるは免かれないが、どの時代

でも國民生活の何處かに必ずそれが現はれてゐる。この意味に於て、歴史は一の聯鎖であつて、現代は過去の成果であり、同時に將來への出發點である。現代の尊重すべき所以は、豊富なる過去を内容とし、多望なる將來に進み行くべき聯鎖であるからである。現代が、生氣あり、活動的であらねばならぬのも、この聯鎖の任務を認めるからである。眞に現代を理解し現代に生きんとする者は、歴史を究めて將來に注目しなければならぬ。昔の人も温故知新といつて居るが、こゝに新といふのは無論現在と將來とを指すのである。また歴史は過去の政治であり、政治は現代の歴史であるともいはれるが、これまた似よりたる意義の語である。

そも、歴史的事實は、如何に些細なるものであつても、何等かの意義に於て、その時代の精神を宿してゐる。されば、牛溲馬勃、敗鼓の皮も良醫は之を用ふといはれるやうに、歴史家は、一事件の起伏、一人物の存亡は勿論、時によ

りては一石一木、一隻語、一文字の上に於ても、民族國民の時代的精神を讀まうとする。歴史は、一面より觀れば、多くの部門に分れて取扱はるべきものであるけれども、また一面より觀れば、綜合統一せられなければならぬものである、一にして多、多にして一である。是に於て、歴史に關する叢書の價値と使命とを語る事が出来る。

瀬川頼太郎君は國史に造詣あり、其研究方法に於て獨得の見識ある人である。このたび君の計畫せられたる江戸時代文化史叢書は、江戸時代文化のあらゆる方面に亘つて斯道の諸大家が各々其專攻せられたる部門を擔當し、多年研鑽の結果を發表せられるのである。予はこれを、上に述べたる歴史哲學論めきたる立場から觀て、最も意義の深きものであると信ずる。抑々江戸時代は國史中の一時代に過ぎぬ、されども國史中の注意すべき一時代である、就中文化史の上からは最も重要な時代である、國民固有の精

神の如きも學問の進歩と相須つて、十分に現はれてゐる。江戸時代の泰平に孚化せられたる燦然たる文化あつてこそ、維新以後狂瀾怒濤の如き勢を以て入り來つた泰西の文化を、よく攝取しよく消化し得て、今日の昭代を現出したのである。かうした叢書の企が、今日まで企てられずにゐたことを、我輩は寧ろ物淋しくも、不思議にも感じてゐたのである。思ふに本叢書は、これを叢書として総合的に觀れば、江戸時代に於ける文化史の一大體系であり、これを分冊として觀れば、各々一部の纏つた研究報告であつて、孰れにしても、史學界に貢献するところ、蓋し多大なるものがあるであらうと思ふ。今本叢書の成るに當つて、所懐を述べて以て序とする。

昭和二年十二月十五日

文學博士 三 上 參 次

卷 頭 の 言

歡樂の江戸時代、鬱屈の江戸時代、吞氣の江戸時代、不安の江戸時代、これが江戸時代の姿で有つた。

吞氣なるが故に歡樂があり、不安なるが故に鬱屈する、そも江戸時代の創立者徳川家康といふ人が、手固い、丈夫向きの人だつたか、はりに、陽氣な人で無かつたのである、どちらかと云へば陰氣な人だつた、始末屋で、辛抱人で、一生コツ／＼と働いて、この幕府といふ大身代をこしらへた、二代三代は先づよしとして、四代でやゝ籬がゆるみ、五代は人間より犬を大切にするやうな半きちがひ、四代までの反動で歡樂を欲した、鬱屈の江戸は、はしやぎ出した、これが有名な元祿時代だ、六代はこれを矯め直さうとして、天、年を假さず、七代は更に早く天、年を假さず、八代でやつと引きしめ、徳川中興の將軍と

向つて近世日本文化史研究會の事を語り、同會が江戸時代の文化を各方面の大家名流に執筆を乞ひ、廣く頒布するの美舉なるを説き、私に川柳を受持つ可く紹介をしたと附け加へた、數日の後、同會の人に逢ひいろく語り合ひ、大に我意を得た者があつたので、直ちに承諾した。

が、此に第一に困つたのは、材料とす可き古書に乏しいことだつた、私は新川柳興立以降二十年間、零々細々、古本屋を漁り、露店で掘り出し、蒐集したものを、悉く十二年の震火で灰にした、多くの藏書に代へて火の中を擔ぎ出した借り物の萬句合寫本は、岡田三面子君に返却した、残つてゐるのは、謄寫本と活版本ばかりだ、私も小兒の時分は、八犬傳を暗誦して人を驚かしたこともあるが、今日では逆も焼けた本の暗記などは爲し得ない、困つたな、と腕を拱ぬいて居るところへ、天祐か、神助か、羽前の某素封家(本人の意志で姓名を祕す)から、珍藏の柳書全部を提供された、別項の引用書目の殆んど全部がそれである。

たゞ参考までに一讀したのもあるが、多少なり其助けを借りた、残念だつたのは、あの中、元祿の珍書『誹諧誕生日』、寶曆の珍書『眉斧日録』、明和の珍書『富貴風』の三冊を接手したのが、すでに脱稿して印刷へ廻した後だつたので、其句を拾ふことが出来なかつた一事である、『誹諧誕生日』は小西來山の點で、本書に在る來山の點とはちがひ、なか／＼の佳句がある。

(題) 淋しいことはどうもいはれず

壁越しに猿引の歌書きとめる

(題) 近い正月く

尾をふつて來をれば損はいかぬのに

(題) 是はけうがるく

五千石箸ではさんで御さかづき

(題) 念の入りたるあるきやう哉

五千兩降らば 貴様へ 五十兩

これ等は元祿川柳の代表と推して可なりだらう、次に『眉斧日録』は寶曆二年に板行されたもので

荒行の背中のかはく松の風

あてにせぬ晝寢の夢に富士の山

あまり佳い句は無いやうだ、十四字が多い、武玉川に似て居る、明和六年の『高貴風』には、

無筆にも耻ぢず家主横ぶとり

朝の事忘るゝばかり日の永さ

等の句がある、多くの俳句と雑居して、かうした前句附のあるものも、さすがに明和だと肯がはれる。

私は、今の『川柳人』の前身『大正川柳』の其又前身の『川柳』といふ雑誌を出してゐた時(明治四十年)芭蕉の川柳として、猿蓑から抜いた數句を掲げたことがある、本書では、すでに芭蕉も川柳家だと迄云つてゐるから、それを掲げてても好いのだが、さういふ論法で行けば、どこの俳諧運座でも川柳の二ツや三ツは、きつと出来る、それを一々川柳へ持ち込むのは面白くない、其角のは前句の選をして居ることを発見したから、りつぱに川柳の選者と云ひ得る實證がある、芭蕉にはそれが無い、恐らく彼は終身前句附の選はしなかつたらう。

尙ほこの引用書の中で、最初文化文政以後の狂句をも紹介して、江戸の所謂大御所様時代の民間社會の片鱗を伺がふとしたのが、大に豫定の頁數を

超過したので、割愛した爲めに、其句をあらはすことの出来なかつたのもある、猿菟玖波の如きは、前にちよつと名を出して居りながら、後に引用する機会が無かつた。

いま、盛んに校正をやつて居る、かうした方がよかつた、あゝ論じた方がわかりが早かつた、なぞと氣のつく所もあるが、ヤハリ蟹は甲羅に似せて穴を掘る、私はどこまでも私だ、私以上のことも出来なければ、また私以下のこともされない、私は江戸時代の川柳をこの書で云つて居るやうに見て居る、恐らく間ちがひは無からう、と思ふ、これまで多くの人の江戸を見る目はいろいろで、所謂江戸萬能論者の目には、江戸は黄金世界、極樂淨土、江戸ッ兒と云へば、ピンからキリまで五分も透かさぬ、大通人、風流男、意氣、其物、粹の結晶と映つて来る、事々物々皆それで、江戸前と云へばまづい料理もうまく、江戸好みといへばきたない着物もきれいだ、とある、ひるがへつて、江戸排斥論者の目

にうつるものは、あの輕佻浮華、オツチヨコチヨイの出たところ勝負、口先ばかりはらわたの無い五月の空の紙の鯉、オダテとモッコに乗りたくねい、と云つて、いちばんのりやすい人種、氣まぐれの、怒りつばい、喧嘩なら人のまで買つて出て、其癖大敗北のひどい目に合つて、鉢巻してうん／＼唸り、はては泣く、と云つた風な人物がうつる、一事が萬事、兩極端の江戸崇拜と江戸排斥と、どちらも中庸を得て居ない。

私はそのどちらにも偏したところが有ると思ふから、しばらく身を江戸から遠ざけ、さて高處に立つて鳥瞰した、さうしてじつとこの江戸時代の川柳を見つめた、いかにして私が今、第一線に立つて奮闘しつゝある川柳革新の料に資せんかを考へつゝ。

私は歡樂の江戸や、呑氣な江戸の傳統を甘んじて繼續する愚を學ぶに堪へない、鬱屈の江戸と、不安の江戸とは、今も亦た昔の如し、昔もヤハリ今の如

くだつたらうか。

この書名を『江戸時代の川柳』としたのは、すなはち近世日本文化史研究会の趣旨に添ふたのだが、實質は前句附の沿革史、川柳の變遷史なのだから、これを『川柳史』とした方がすべてにわかりやすく、亦たしかく命名して差聞ない、といふ自信もあるから、いよゝゝ刊行の曉は『川柳史』とするかも知れない、豫かじめことわつて置く。

昭和二年十二月十七日

井上劍花坊

引用書目

誹諧柳多留(初篇より百五十篇迄)數冊の不足あり、國書刊行會の活字本にて補ふ。

川柳評萬句合(寶曆十年以降明和八年迄)原書并に寫本又は抄。

露丸評萬句合 机鳥評萬句合 白龜萬句合

菊丈萬句合 南華坊評萬句合 幸々評萬句合

桃人評萬句合 來山點誹諧誕生日 元祿寶の市

あづまからげ 俳諧江戸みやげ 俳諧高天鶯

難波土産 武玉川(燕都枝折) 古今前句集(柳多留拾遺)

忍び笠 收月點 雲鼓點

俳諧萬人講 若るびす 俳諧三尺の鞭

引用書目

寶曆折句	寶曆俳諧折句式	俳諧つなぎ(鰯)
眉斧日録	川ぞひ柳	俳諧金砂子
滑稽發句集前後篇	冠獨歩行	扇の的
富貴丸	桂窓點譜	冠吟玉の光
机の塵	和田の松	盆の月
新選猿菟玖波集	青木賊	神の花衣
種彦二葉柳	新編柳樽	新々柳樽
福原砂子	歌羅衣	紀の玉川
京傳奇妙圖彙	冠附化粧紙	あらひよね
櫻多留	村田了阿筆柳樽抄	俳風富士見笠
飛彈櫻山八幡宮奉額狂句合	五世川柳佃島住吉社奉額狂句合	六世川柳篇しげり柳
柳の糸	俳風柳のいしふみ	諸國奉納濱の眞砂

目次

第一章 川柳の起源

1

俳諧連歌の精神は川柳(一)俳諧に犬筑波川柳に猿筑波(三)十七字或は十四字で獨立した詩(四)連歌に有心無心川柳に革新守舊(六)川柳の最初は連歌の無心派(七)宗鑑も芭蕉も川柳家(八)川柳の本質(九)川柳俳句の區別言明(九)川柳名稱のいろいろ(一〇)川柳の元祖は山崎宗鑑(一二)宗鑑の辭世と川柳の辭世(一三)

第二章 元祿の川柳

14

川柳の眞珠は前句附の豚から(一四)太宰春臺の川柳觀(一六)來山も園女も川柳の選者(二〇)言水や其角が川柳の選者(二四)其角點の川柳の特色(二六)

第三章 萬句合前の川柳

31

俳諧あづまからげ(三二)寶曆明和準備時代の句(三五)寶曆明和の露はらひ(四一)

第四章 寶曆の萬句合

43

寶曆明和の新興川柳(四三)寶曆明和の俳人(四四)前句附選の第一人者柄井川柳(四七)天滿宮梅櫻松仁義禮智信鶴龜叶(六四)前句附の作り方(六七)

第五章 明和の萬句合

75

稚氣童心が抜き切らぬ(七五)前句附方細説(八三)付き過ぎと附かず離れずと(八五)古川柳獅子身中の虫(八七)滑稽の上乗(八九)前句附なるが故にこの佳句(九〇)理窟が理窟にきこえない(九三)

第六章 萬句合の年度別

95

寶曆十二年の萬句合(九六)寶曆十三年の萬句合(一〇〇)明和元年の萬句合(一〇二)明和川柳の壇場(一〇七)明和二年の萬句合(一一三)江戸氣分の川柳(一二四)明和五六年の萬句合(一一六)前句附興行者の乞食態度(一二二)

第七章 露丸點の萬句合

123

雲鼓點の驚異(一二四)收月の號は一人でない(一二七)露丸點の萬句合(一三一)露丸も川柳ほど盛んにはない(一三三)當時は拍手喝采の句か(一三四)萬句合の取次と會林(一三八)明和安永の川柳團體(一

三九)當時の川柳家の雅號(一四〇)

第八章 川柳でない川柳

一四二

白龜の萬句合(一四三)合印に花鳥風月(一四四)俳句には見えない特色(一四九)掬兒を詠んだ川柳(一五一)桃人評の萬句合(一五三)俗臭芬々の月並俳句(一五七)菊丈の萬句合(一五八)幸々評の萬句合(一六五)幸々評は川柳評にも劣らない(一六九)柄井川柳だけ光つて居た(一七〇)

第九章 組連句合の川柳

一七一

注意すべき組連句合(一七二)初瀬連の組連句合(一七三)奇抜な見方の川柳(一七九)蓬萊連の組連句合(一八〇)朱樂菅江も川柳家(一八一)川そひ柳の序文(一八一)江戸の江戸たる所以(一九四)天に杜鵑地に初鰓(一九四)一人殺すと二人殖え(一九五)

第十章 正徳冠附と寶曆折句

一九七

折句の如きも一個の存在(一九七)大人にして幼稚な文字遊戲(二〇三)寶曆折句なる小冊子(二〇四)川柳人の他山の石(二一一)

第十一章 萬句合と其時代

二一一

寶の市と忍び笠と知恵袋(二二三)盃から盃へかへる(二二四)メクラ猫なる點者かな(二二五)世にぬす人の種はつきない(二二六)庖刀の間へ伊勢海老(二二〇)輪をはずす時計(二二二)花見に碁盤の贅澤(二二三)蝶々子評の鎖國敵愾(二二五)

第十二章 誹風柳多留初篇

二二八

柄井川柳と吳陵軒可有(二二八)柳多留初篇の序文(二二九)初篇柳多留に數種の本(二三二)寛政改革と柳樽の改版(二三四)死に切つて嬉しきうなる顔二つ(二三五)可笑味、穿ち味、輕味(二三六)かな佛は拜んだあとをたゞかれる(二三八)俳諧歌仙運座の句(二四〇)古川柳の碧巖錄(二四一)

第十三章 柳多留二篇三篇

二四二

二篇は高尚優雅、三篇は豪宕不羈(二四二)これがホントの川柳だ(二四五)一唱三嘆の名句(二四七)今人の及ばぬ寫生吟(二五〇)社會下層の私生活を句にする(二五二)助動詞、間投詞の技巧(二五四)柳多留三篇の影響を受けた川柳(二五六)三篇の影響を受けた劍花坊の句(二五七)柳多留三篇と劍花坊(二

六〇)當時の新川柳諸家の句(二六二)柄井川柳と雄大な句(二六六)

第十四章 柳多留四篇以後

二六八

多少の商賈氣大衆歡迎(二六九)柳多留四篇に墮落の兆(二六九)全柳多留中屈指の傑作(二七〇)川柳を
紛本にした蕪村の句(二七四)滑稽川柳の事(二七五)心的遏止の現象(二七五)柳多留五篇の貢獻(二七
六)紙屑買の親の代(二七八)『城の馬ン場』の俗謡(二八〇)吳陵軒の編纂法の裏書(二八一)

第十五章 武玉川と古今前句集

二八三

武玉川と古今前句集(二八三)俳席かせぎの虎の巻(二八五)武玉川の名燕都技折(二九一)二世紀逸、初
世の名を墮さず(二九二)雅にして興たるべし(二九四)武玉川にも俳諧の俳を誹(二九五)五ツ名のある
古今前句集(二九六)古今の序に擬した序文(二九七)前句のさま六つなり(二九八)川柳と露丸を人磨赤
人(三〇〇)淺學の爲か輕蔑か(三〇一)四谷赤坂廻町(三〇三)封建時代の長男尊重(三〇四)今も昔も哲
學者の貧(三〇五)醜婦で上下横へ顔なそむける(三〇六)東海道中山道のとんだ名物(三〇八)墮胎専門
の不正醫者(三一〇)關八州の王子の狐火(三一二)小體大用の滑稽味(三一五)遊里を咸陽芝居を三國
(三一五)考がへさせる川柳(三一六)

第十六章 破格から墮落へ

三一八

成功を急ぎ好奇に走る(三一八)猛然と五七五調を破る(三一九)川柳の各組連詠み込み(三二一)作家が
個人賣名の慾望(三二三)吳陵軒可有の柳號(三二五)覺悟が無く目的も持たない(三二六)遊戯的大會の
誇稱(三二七)

第十七章 柄井川柳の晩年と其後

三二八

眞珠を再び豚の餌桶へ(三二八)壁訴訟の惡洒落(三二九)吳陵軒の選眼(三三〇)吳陵軒可有の死(三三
二)柄井川柳の死(三三四)川柳の後繼に和笛(三三五)和笛の死(三三六)退歩驚くべき選眼(三三八)文
日堂礫川の人望(三三八)二世川柳の襲名(三三九)御江戸自慢徳川様禮讚(三四〇)川柳の巻軸に月並俳
句(三四二)自ら悔り人侮る(三四二)三世川柳の選評を拒絶す(三四三)十返舎一九の柳樽序文(三四四)
川柳の字烟となる(三四五)賤丸の假判者(三四六)

第十八章 江戸川柳墮落の徑路

三四七

狂句元祖四世川柳(三四七)柳亭種彦川柳を作る(三四八)四世川柳の襲名大會(三四九)種彦の柳樽序文

(三四九)取りも取つた作りも作つた(三五一)文日堂が群盲評象の故事(三五三)川柳界の伊尹大甲(三五四)俳諧つのぎり(三五四)四世川柳成田山奉額大會(三五六)五世川柳の新篇柳樽(三五七)明和川柳と天保川柳の比較(三五九)川柳を毒するお祭的大會(三五九)

第十九章 川柳と江戸の社會

三六一

京阪の川柳は質に於て江戸に及ばない(三六二)地方川柳は俳人の餘技(三六二)地方人の膏血を吸つた江戸ッ兒(三六三)腐敗したからこそ美酒が醸された(三六四)醜業婦を待つに玉侯英雄を以てす(三六六)きりやうのわるさ、男ぶりのみぢめさ(三六八)私は昔の江戸ッ兒になりたくない(三七〇)りつばな藝術的廓吟(三七二)廓吟に教訓川柳(三七四)ぞつとする淫賣窟の句(三七五)丸山の客は一萬三千里(三七六)芝居川柳の特色(三七八)反吐をつくやうな菊五郎(三七八)てれつくてんの頼朝(三七九)昔の芝居の大道具(三八〇)詠詩川柳の價値(三八四)詩は詩だが淡泊な詩(三八四)目玉を磨く親仁(三八七)下女と居候と獨者(三八九)冠婚葬祭の川柳(三九〇)士農工商の川柳(三九一)戀愛川柳(三九二)旅行の川柳(三九四)社會の各方面を見た川柳(三九六)詠詩川柳をかりて鬱憤をはらす(三九七)最後を飾る古川柳真髓(三九九)世界の黎明に江戸の螢火(四〇一)江戸の二字は川柳に於て光る(四〇二) —終—

第一章 川柳の起源

川柳の起源は古い、連歌、俳諧(俳句では無い)の名の中に在つた搖籃時代は、江戸以前に在り、また俳諧に就いては、江戸の俳句を語る人が委しく述べらるゝことだらうから、其方へ譲つて、川柳に關係した點だけを御話する。

連歌の精神、俳諧の目的は、俳句に存せずして川柳に存す、と謂つて可い、俳句は以前に發句と云ひ、俳諧連歌の冒頭の句を取つたものである。發句に必ず季を入れること、オモに天地自然の風物、花

俳諧連歌の精神は川柳

鳥風月の趣きを詠じたのは、發句の習慣が残つて居るのだ、とばかり云つてはわかりにくい。すこしくそれについて話さなければならぬ。

和歌の三十一文字が、素戔鳴尊の

八雲立つ出雲八重垣妻ごめに

八重垣つくるその八重垣を

から始まつた、といふことは誰も知つて居ることだが、これは必ずしもこの御歌が始め、といふわけはあるまい。我國上古の此時代(神代)に、すでに斯うした三十一文字を連ね、其感情を表現することが行はれて居たのだらう。それをたま／＼素戔鳴尊のやうな貴人の口から詠まれ、しかもそれが非常にリズムの好いものだったから、後世に斯うして残つたのだらう。それから人皇の世になつ

ても、第一代神武天皇は、この風の歌を詠んで御出でになる。その皇后にも名歌が有つて古事記に輝やいて居る。りつぱに三十一文字だ。

この三十一文字を二ツに分け、二人して詠む、といふことが行なはれ、日本武尊東征の時、甲斐の火焼の翁に向ひ、

にひばり筑波を過ぎていく夜かねつる

と詠まれたのに、翁が答へて、

かがなべて夜には九の夜日には十日を

と詠んだ。それが證據で、是れ連歌の始めであるといふことを言ひ傳へ、連歌の本には筑波集といふがあり、俳諧には、犬筑波、川柳には猿筑波といふやうに、いづれも筑波を以てこれに名づけて居る、が、これは連歌師や、俳諧師が、自分共の扱かつて居る詩に箔を附け

伊譜に犬筑
波、川柳に
猿筑波

ようとしたのであるが、之は問答歌ともいふ可きもので、神代にも有つた。諸冊二尊の天御柱の御問答も之に類して居る。筑波の問答歌を一ツの歌を二ツに分けて詠んだものだといふ古來の説には首肯出来ない。但しこの一方は十七字、一方は十九字から成り立つて居るものが、どちらもありつばに獨立して居る詩であるとするれば、私の考へる川柳起源論には、非常な有力な證據にはなる。すると、後に連歌と云つた三十一字を二分し、十七字、十四字で連続させたものを除外して、我川柳や俳句は、直ちにこの問答歌の精神を繼承したものだとも云はれる、云はれるでは無い、實際がそれなのだ。もと／＼十七字或は十四字で、獨立した詩を形づくられる性質であるのを、ことさらに、三十一字を二分した形式で、連歌と云ふ遊戯文學をこしらへたのだ。だから、それが後になつて川柳或

十七字或は
十四字で
獨立した詩

は俳句の名で、各々獨立した詩になつたのは、取りも直さず其本質へ還元されたものと云ふて可い。

連歌の始めは、平安朝の末、鎌倉時代の最初、もつとも和歌には御熱心で有つた後鳥羽天皇の御宇から、支那の詩に、柏梁體といふ漢の武帝の朝から始まつたといふ聯句遊戯がある、それに擬して和歌の上の句、下の句を分けて、

桃園の花こそ咲きにけり

頼 經

梅津の梅はちりやしぬらむ

公 資

といふ風に、十七字、十四字を交互に連瑣し、或は三十六句、或は五十句と並べたのがそれである。藤原良經、僧慈鎮といふやうな、有名な歌人が集まつて、柿本衆と號し、和歌の品格を失はないやうにと、いふのを目的として行つて居たのが有心派、之に對して藤原宗行、

連歌に有心
無心、川柳
に革新守舊

僧泰覺といふ人達が、栗本衆と號し、大に調子を下げ、機智滑稽に至つて幼稚な旨として居つたのが無心派で、盛んに其主義で競り合つて居た。たとへば現代の川柳に革新派、守舊派といふ別があるやうに、二ツの傾向が出来るのは、今も昔もちがはない。可笑しいのは、この二傾向が、ズツと今日まで持ち越して、俳句、川柳と爲つても、自づからそれが繼づいて居るのである。委しいことは、これからだん／＼説いて行くと自づから分るが。

概略に大觀したところを總括して云ふと、この後、無心派は衰へて、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代にかけて、専ら有心派が行はれて居たが、室町時代の末に至り、無心派が勃興して狂連歌、即ち俳諧と爲り、連歌師の宗鑑、守武、貞徳は専ら俳人として其名を残したが、宗因の談林俳諧があまりに無心派的になつたので、芭蕉が出て、大に有

川柳の最初
は連歌の無
心派

心派的の上品なものに俳諧を革新して仕舞つた。ところがこの御上品も千篇一律、面白くなつて、勃興したのが無心派の川柳だ。その川柳も、一方は無心派的に、滑稽機智を旨としたが、一方には有心派的に、優雅典麗な、上品なものが有つたのに、低級な作家がそれを物足らずとして、狂句といふものに墮落せしめた。それを明治になつて、劍花坊が有心派的に革新しにかゝつたのが、新川柳である。ところが、それが又二派に分れ、革新派、守舊派で争つて居るのが、現今川柳界の状態である。見えないところに、七百年の絲を引いてゐるから不思議だ。しかも妙なのは、一轉機をする際には必ず無心歌の石が投げられ、それから波瀾が出来て、有心派に目覺めるといふことが常になつて居る。私(劍花坊)の如きも明治時代に川柳革新を叫んだ時には、最初専ら機智滑稽を唱へ、より下劣

な機智滑稽を主とする舊狂句連に對抗したものだ。それが追々目覚めて来て、自分が曾て作つたやうな句を作つて甘んじて居る者を守舊派と見なし、自分は革新の旗の下に、これが改進を迫らなければならなくなつた。宗鑑にもそれが有つた。芭蕉にもそれが有つた。

宗鑑も芭蕉も川柳家

連歌師の宗鑑は、俳人でありまた川柳家である。俳人の芭蕉にも、連歌師の名残りを留めて居ると同時に、川柳家と見られるところもある。こゝで川柳といふは、どんな詩であり、川柳家或は川柳人といふは、いかなる種類の作家を謂ふかの説明をしなければならぬ。

川柳は、狂連歌或は俳諧連歌と稱する聯句の中より、その最初の一句、即ち發句(後に俳句と爲つたもの)を除くの外、他の多くの句

川柳の本質

川柳俳句の區別言明

から變化されたものだ。發句は、自然の風物に觸れ、これを主觀的に、或は客觀的に表現した十七字句で、其以下は三十句あらうが、五十句あらうが、悉く前後の句に因んで作爲したもので、言はゞこしらへものに相違無いが、これを作爲するに當り、作家の態度が眞剣にその心持を吐露したものであれば、發句以上の名句が出来ることもある。俳諧の發句を悉く俳句と稱し得るほどに、其他の聯句の悉くを川柳と稱することは出来ないが、川柳の本質が、この前後の句に因んで作爲された詩である、といふことは出来る。乍併、そんなことを云つて居ると、どこまでが俳諧であり、(俳諧の聯句の中には、發句で無くして、俳句と稱し得可きものもある)どこからが川柳であるかの區別が、甚だ曖昧になるから、此處でハッキリ言明したいと思ふ。それはこの正式の俳諧連歌で無くして、無拘束の自

由奔放で、作句の出来る前句附、或は後句附、少れには冠附、其他の俗に雑俳と稱せられてゐるものは、悉く川柳と稱して差支無いと思ふ。また俳諧興行の結果を、其指導者たる宗匠に判を乞ひ、その宗匠が秀逸として書き留め置き、これを出版した『武玉川』或は『俳諧つのざり』等にあらはれたものは、これを川柳と見て可なりと思ふ。

委しいことは後に説明するが、川柳といふ名稱は、江戸時代中期寶曆明和時代、前句附撰者の名で、いつしか其前句附の名になつたのである。當時には、誰も川柳とは云はず、専ら前句附と云ひ、或は萬句合(刷物の名稱)と云ひ、川柳點と云ひ、柳多留(前句附より撰集された書籍の名稱)と云つて居た。それが後に前句附で無く、一句獨立した時に狂句又は柳風狂句、柳句など稱し、川柳點の點を云は

川柳名稱の
いろいろ

ずして、單に川柳と呼びならはした。明治時代に、私が革新興隆の旗を擧げた時は、新題柳樽と云ひ、別に風俗詩、寸句、短詩などと唱へた人も有つたが、それがいつとは無しに新川柳と爲り、單に川柳と云ふ名稱に定つて仕舞つた。さうして寶曆明和時代の、比較的藝術味に富んだ句の多く出来た時の前句附を古川柳、或は川柳と推稱し、それから以後の前句附で無く、一句立テに成り、狂句、柳句、川柳などと稱した時代の句を、概括して狂句と呼び、之を賤しめ、蔑ろにし、輕視し、唾棄し、學ぶ可からず、倣ふ可からずとした。斯う云ふ風に眞の川柳と目す可く、重ず可く、傳ふ可き時代の句は、當時に於て唯だ前句附と云つただけで、決して川柳とは云はなかつたとすれば、遡つて選者に川柳と號する人が無かつたにせよ、質にして同じ物なれば、これを川柳と稱して可いのである。私がいつも俳諧連

歌の創立者たる山崎宗鑑の發句

手をついて歌申し上ぐる蛙かな

を俳句の元祖となし、

きりたくもありきりたくもなし

へ附けたる前句の

ぬす人をとらへて見れば我子なり

を川柳の元祖として話して居るのは、これに基づいたのである。

無論これも『八雲立つ』を和歌の元祖となし、『にいばり筑波』

を連歌の元祖と言ひ傳へて居るのと同じ理合で、必ずしもそれに

はじまつたと言ふわけでは無い。宗鑑が、連歌より革新して俳諧

連歌を創始した人間であるところから、その人の句を擧げたので

ある。ところが面白いのは、前句附の選者で有つた川柳が、自分を

川柳の元祖
は山崎の宗鑑

一度でも川柳家なぞと思つたことは無かつたらうと思はるゝと
同様に、宗鑑も決して自分を俳人なぞとは考へては居ず、依然連歌
師を以て自得して居たのである。宗鑑の辭世が

宗鑑はどこへと人の問ふたれば

ちと用事ありあの世へと云へ

と云つたやうな三十一文字で、川柳の辭世が

こがらしのあとで芽を吹け川柳

と云ふ俳句だつたのは、いちばんそれを證據立てることだ。人の
將に死なんとするときは、必ず其本性をあらはすのだらう。

宗鑑の辭世
と川柳の辭世

第二章 元祿の川柳

遠き昔の連歌勃興により、世にあらはれた川柳の精神を、この江戸時代へ一個の詩として産み出してくれた前句附といふものは、どういふものであるか、といふと、アマリ香ばしいものでは無かつた。川柳といふ眞珠は、實にこの前句附といふ豚の腹から産まれたのだ。江戸時代以前にも、さうした類似の物は有つた。前章に掲げた宗鑑の「ぬす人をとらへて見れば」も其一例ではあるが、前句附と銘打つて、これが社會大衆の間に興行されたのは、江戸時代の第一黄金時代と云はれた元祿期に於いてである。其實物は

川柳の眞珠
は前句附の
豚から

後の所謂古川柳全盛時代の寶曆明和期で、御目にかけるが、此處でも古書にあらはれたところは、洩らすわけに行かない。徂徠門の儒者で、其人ありと知られた太宰春臺の「獨語」を見ると。

元祿の初め頃より、前句附といふこと起れり。其の法、宗匠より下の句を一句出して、多くの人に、上の句を附けさせて、點に第一第二の品を命じて、甲乙の次第に従がひて賞を行なふ。其賞は、或は布帛、或は壓物など、そこばく直あるものを出だす。布帛、器物に望なきものは、其の直なる金銀をとる。此賞をえんとして、貴賤となく我もく、と句を附けて、日々に點錢を費す。是則ち博奕の類なり、此事盛に行はれて、世の俗人皆是を好む程に、下の句に、上の句を付くるを猶むづかしとして、宗匠より上の句初の五文字を出だして、次

の七文字、五文字を諸人につけさせることになれり。是を冠附とも、笠附とも云ふ。かくいやしきわざになりぬれば、下部のわらは、げすまでも、俳諧といふことを知りて、笠附して褒美とらんとするほどに詞いよいよやしくなれり。

太宰春臺の
川柳観

柳澤吉保の保護を受けてゐた徂徠門に、特殊なブルジョア氣分の有つた春臺の言草へ、直ちに同意することは出来ず、『下部のわらは、げすまでも俳諧といふことを知りて』は藝術の民衆化で、今日から見れば、わるいことでは無いが『笠附して褒美とらんとする』ことは甚だよくないことで、殊に前句附と笠附と同様に世の中から扱かはれたことは、とこしへに川柳の道をわざわひすることの大なるものである。『點錢を費す』といふのは入花料のことで、一句につきいくらか、十句につき何錢といふ前納金のことだ。『我

衣』といふ本にも、

貞享頃より正徳、享保の末まで、町々に前句附、冠附とて、點者より題を出してつけさせ、宜には褒美つかはし、高下をして、次第に甲乙有て出す。前句の仕方凡句數何干何と記す、料十六銅

◎ならぬことかなく

こちとらは及ばぬこひの細作り

何 某

◎にほひこそすれ

ならうなら井戸のを打つて貰ひたい (下水を庭へ打つことなるべし)

◎ならぬことかなく

國などで毎日入ると申すのは (錢湯なり)

◎やすい事かなく

一文で思ひの儘に辛らがらせ(蕃椒のことなり)

冠附◎となりから

酔ふ紅梅の垣根ごし

◎赤くなる

たとん官して緋の衣

◎はやいこと

御弓町から矢の使ひ

先づはかよふの品を冠附といふ(委しくは此ころの冠付の本あるものなり)

この前句附の點者出題に『にはひこそすれ〜』といふやうな重言を用ゐることは、後の寶曆明和の時代までも繼續した。『貞享頃より正徳、享保の末』とあるを年數で云ふと、貞享が四年、元祿が

十六年、寶永が七年、正徳が五年、享保が二十年で、五十餘年間を經、江戸幕府は綱吉から家宣、家繼、吉宗となつた。元祿といふ黄金時代か腐敗時代か、其處でいちばん幅をやつて居る。享保は所謂徳川中興の將軍といはれた吉宗の時代で、大岡忠相のやうな町奉行が居たりして、風紀の紊亂をたゞし、民俗の頽廢を防ぐ、といふ風だつたので、この博奕類似と見なされた前句附、其他は禁止の命令を出され、公然に行なふことは出來ず、内密で興行されて居た。それが元文、寛保、延享、寛延を經て、寶曆、明和となると、例の田沼父子の專權に、腐敗の骨頂、文明の爛熟といふ江戸を現出し、人間は誰も彼も現世の天國に憧がれて、醉生夢死の馬鹿を盡した第二黄金時代が出來上つたので、賭博類似の前句附などは、猛然として勃興し、所謂豚の腹から眞珠の出した川柳全盛時代と爲つたのである。それは

來山も園女
も川柳の選
者

後の話で、前に戻り前記『獨語』『我衣』等に見えた元祿時代の前句附、私の稱して元祿時代の川柳といふ者は、どんな物だつたか、といふに、『俳諧萬人講』に、當時の俳人として有名な十萬堂小西來山の點になるものがある。

◎久しぶりなり〜

手のひらに留守の間の子が乗りて立ち
水風呂も水が多けりやわきにくい
おれじやとて江戸では帯も解かなんだ

◎ちやつと其間に〜

春過ぎて夏をいさはさぬ歌がるた
紙がなか手に書いたのがいつちよい

まことに幼稚千萬なものだ。これでは成程後の寶曆、明和の川柳

點の様に、世に持囃されなかつたのも道理である。同じ書に、これも園秀俳人として知られた園女の點がある。

◎しづかなりけり〜

ちるあとへ來たも花見の念ばらし
目ぬぐひを持つて障子によりかゝり

◎出來たり〜これは出來たり

ぬれ疊家主の門へほして置く
我戀を行燈に知らす針のあと

◎ほのぐらい事〜

昆布出しの下たきつけて手をあぶる
物縫ふを何が見たいぞ男衆
鶯の柳へ來てもたゞはゐす

女は女だけの見方があり、選眼は遠く來山の上に在る。「目ぬぐひ」の句などは、りつぱな川柳として、これを寶曆明和の前句附へ入れとも耻かしくない。其他諸家の點で、川柳として見る可きものを舉げて見る。

文流點

明日しらぬ命と花を傘で見ると
置火燧親子八人片足づゝ
乗物の窓につまらぬ富士の山

豊流點

誰それも死んだくと云ひくらし
同船のいろに身うちがこそばゆく
生垣の杉にて隠す淡路島

萬海點

通し矢の天下は天下の天下にて
愛着の嫉みは神のゆるしにて
楠木が今いやろなら淋しかろ

(この一句「天下太平國土安穩」の前句)

萬年の命を買ふてはなす龜
助太刀に貫ふ我首敵の首
盆彼岸此世の外へつけとゞけ

鷺水點

大比叡の嵐折れこむ京扇
迷ひ子に聲呼び嗚らすみだれ髪
よし原のあぶら漲ぎる角田川

言水點

一ツづゝほめく出す畚の鴨

萬病を退治しに来る藥舟

言水や其角
が川柳の選
者

言水は、『こがらしのはてはありけり海の音』の發句で、こがらしの言水といはれた池西言水である。かうした當時で第一流の俳人等が、いづれも前句附の點者(選者)になつて居る。以上はいづれも京阪の前句附だ。試みに『江戸みやげ』から江戸の前句附の一部を抜いて見る。其角、不角、不卜等が評をした前句附の高點で元祿八、九、十年頃のものだ

不角點

福引の高下小判と水二盃
目くばせは心の文字のふみ使

とらはれの身は楊子にて筆始め
口上を突く手の甲に書き付けて
一生を伊勢のお玉が遊び死に
相惚れはびいどろ紙の障子越

不卜點

國むかひ寢物語りの月明り
留守の夜も抱きついて寝る袴ごし
血判をする牛王にて鼻をかみ
聞きたさは乞食も同しほとゝぎす
勘當の子に母親のかくし扶持
江戸中の女房泣かせよ吉原め

其角點

戀知らぬ娘は死んで油蟲
業平が惚れし女に貞女無し
傾城の袖はなみだの飛鳥川
夜伽する心を死出の御錢別
妻の手をもぎりはなせば母のふみ
書置に何のめでたく候かしく
死にたくば死ねと剃刀あてがはれ
かみそりを持ってば遊女も女武者
親の代の築山村の草刈場

其角點の川柳の特色

さすがに、其角には其角だけの選眼は有つたやうだが、選ばれた前句附其物が、寶曆明和ほどの物で無かつたから、今日に至りて一句立に其生命を留めるやうにならなかつたので、寶曆明和の川柳は

江戸に於て其全盛を極めたが、それは多く所謂江戸座の俳人、即ち其角の亞流を以て自ら居る俳人等によりて爲されたのである。其角の俳句として有名な

明月や居酒のまんと頬かむり
水打てや蟬も雀も濡るゝほど
かたつむり酒のさかなに匍はせけり
武帝には留守と答へよ秋の風
元日に炭賣十の指黒し
闇の夜は吉原ばかり月夜かな
瓜むいて猿に食はする暑さかな

修辭は即ち俳句なれど、着想は所謂川柳味のあるものが多いのも偶然にあらず、と云へば云へる。

この外、元祿の川柳として、のこして置きたい、と思ふ者に、左の如きが有る。

越してから脈とつて見る大井川
沈む日に身の影をさへ見失なひ
口もとにうみ芋の屑をぶらさげる
歌ほめてやれば鱒を持つて来る
手を負ふてからは刀も怖わからず
獨寢の枕に様をつけて抱き
この雪によくこそ來たと仰せられ
何につけかにつけ世話の世の中ぞ
文字無くは唐と日本はつんぼ同士
振袖の重き身ぶりもかくされず

片里のあるじ櫻にやしなはれ
のがれ入る山は浮世の蠅も來ず
あをのいて手をさし上げる天の原
月と日の同じ字形の長短か
人間の生るゝまでは泥の海
母親の起しに來たる網代守
我里に我を見知らぬ墨ごろも
聲かぎり泣くにいのちのある捨子
うかれ女になれとは親の産まざりし
異見する男も同じ色男
大井川越す間は人に慾も無し
髪あらば獨は櫻見にやらじ

子の塚に日にく親の物狂ひ

これは『高天鷲』や『難波土産』から抜いたもので、いふまでも無く、京阪の前句附である。要するに、元祿期の前句附は、これを川柳全盛の寶曆明和期にくらべたら、はるかに幼稚で、元祿の川柳など云ふのは無理なやうにもあるが、後人を川柳全盛期に導びいた先鞭を着けたものとするれば、決してこれを輕んずることは出來まいと思ふ。唯だ前に出した「人間の生るゝまで」の一句の如きは、たとへ佛説から想を取つたものにせよ、珍らしい砂中の黄金である。

第三章 萬句合前の川柳

元祿の川柳にも、まだ御話の材料はあるが、程々で切上げ、前途を急ぎ、ちつとも早く、寶曆明和の全盛期に入りたのである。それには私がいつも古川柳の妙法蓮華經だと稱してゐる『誹風柳多留』を紹介する順序だが、それより前に、この柳多留の親本である當時の『萬句合』を擧げねばならぬ。然るに私はこゝで其萬句合よりも、一步先に紹介したい或物を見出だした。と云へば川柳通の讀者は、きつと早合點をして、では柳書にして俳書たる『俳諧武玉川』か或は『俳諧つのぎり』（原本では鶺鴒の字を書いてつ、

ざりと讀ませてある)だらうと思はれさうだが、違がふ。『俳諧あづまからげ』なるものを、一讀して貰いたいのである。それは初代柄井川柳によりて選ばれた『前句附萬句合』のはじめて刊行された寶曆七年より二年前、寶曆五年に單行本として出された本である。(前句附萬句合は、一ヶ月に三回、二三枚から四五枚づゝ刊行された。恰も今日の新聞雑誌のやうなものだつた。)前に云つた如く前句附が、享保政治で禁止されたのを、田沼政治で解禁の形になり、盛んに行はれ出した。其過渡時代の前句附の一斑を(アマリ後に近過ぎては居るが)見ることが出來やうかと思ふからである。江戸の一俳人の手で、發行されたもので、其序文がある。

俳諧あづま
からげ

凡和歌の情は新しきをもつて先とし、詞は舊をもつて用ゆべしとは、黃門定家卿の説なり。連歌、俳諧、前句、冠付等にお

よぶまで、なんぞ此おしへに背かんや。このゆへに去年の秋より選置し、濱の眞砂子の數々の中より拾ひ集めて、「はいかいあづまからげ」と題して、寶曆五つの春嘯欄干、序をなす而已。

湖 月

去年の秋とあるから、寶曆四年以來の物と見える。

催しにけりく
そろりくくとく

出しておく

摺る墨も音なし川の夜の文
正月の遊びに不斷ならぬ事
大石に成る楠も二葉から

高輪の廿六夜は戀にとれ
若の勝負つかぬ内には中のよさ

堀に紋日がとゞこほり

「催しにけりく」、「そろりく」とくは前句附の題で、「出しておく」は冠附の題である。句の肩に「ソ」とあるは「そろり」の題へ附け「モ」とあるは「催し」の題へ附けたといふ合印である。讀者照合してこれを味はれたら、自然前句附の如何なるものかわかるだらう。「堀に紋日」は吉原の女郎から出した客への無心が、三谷堀に停滯して居る。といふ意味の冠附だらう。

心がけりく

ながめてぞいるく

よいけしき

蟲干の武士に劣らぬ泉岳寺
虚無僧の覗いて通る八幡竹
美しいかしくの釘ははづされず
上戸でも下戸の女房を持ちたがり

土手に入日のほとゝぎす

「蟲干」は四十七士の遺物。「虚無僧」は敵討、「美しい」は情婦よりの艶書、むしろ女郎のふみ。「上戸でも」の句の如きは一句立としては平凡の句だが、附句としては説明が出来る。乍併かういふ附方はアマリに付き過ぎるといふのではなからうか。以下は題、合印、冠附等を記さず、當時の前句附、即ち寶曆明和の川柳が、まだ準備時代に在つた時の句として見る可きものを（『俳諧あづまからげ』から）抜萃する。

寶曆明和準備時代の句

入相は馬士の耳にもあはれなり
花咲くと惚れられたがり惚れたがり
情なや枯木に蔦のかゝり人
三味線は生れぬ先も膝へのり
慇懃に叱られてより思ひ切り
書いた内いつち嘘なにうけ出され
花嫁に堀井戸一つかいほされ
退屈の櫛はうしろへぬけて落ち
御無心を申し参らせ候かしく
畑にも沖津白浪蛸の番
田鼠化して嫁は鶉の抱へ帯
鎗掛へ長刀の場を明けて置き

虫の音がやむと枕に耳をよせ
いとまなみ紙漉船へ宵の月
ねむたげに起きて娘の男帯
六波羅の昔をかこつ後家の閨
口説く身も口説かるゝ身も手を合せ
恨みぼく我顔を見る塗枕
佛にもなるべき人が鬼となり
女房の留守と見えたる袖だゝみ
日にぬれて夜干す海女の汐ごろも
よむふみの句切々々は涙なり
大名の胤はいづくへ落しても
母親を父の雛とはおもへども

親は賣り他人は買ふてかわゆがる
見たい顔見せたい顔に逢ふた顔
炭消の脈を見て寝る風の音
人の目を縫ふや娘の戀衣
つとめする身にも女のぐちはあり
世の中よ天に祈り子地に捨子
結納がすむと娘に錠をびん
灰吹も掃除の時はのぞかれて
心中を大かみなりでのばしけり
播鉢の目を赤くするとうがらし
拍子木の音も金より冴えて行く
捨てし身も花の盛りを嬉しがり

時雨傘片袖づゝは濡れて行く
湯殿からすぐにお部屋へさそふ水
大名も及ばぬ旅の夫婦づれ
そろくくと上戸に戻る病あがり
のべ紙で草を押へりや脇で鳴く
皮切を押へて貰ふほそい指
金やればさまの付かざる里も無し
往くもありかへるも蟻の熊野道
燈籠を見に行く人は夏の蟲
挑灯が消えて座頭に手をひかれ
聾念佛姑法華嫁門徒
牛込といへどすくなし馬ばかり

川越しの女房は雨をうれしがり
おもふ程腹の立たれぬさしむかひ
美くしい顔に生れて氣がつまり
死に行く身にもよけるはぬかり道
どうすればそしてお前の氣に入るへ
離別状を紙屑買に賣つてやり
眞晝間乗つて寝に行く人もあり
心中と身請の座敷二た間明き
女郎にうけとられたが運のつき
死たがる女のくせに身だしなみ
年増より少し器量は次なれど
旅芝居みんなたゝんで馬につけ

わけといふものを苦界の外に持ち
置き直す迄も捨子に親の慾
仲人へ嬉しい禮をゑいやつと
のぞかれて盃の内にかしこまり
鶏合せ鳥より人の目がすはり

寶曆明和の
露はらひ

たいがいはずでに全盛期の川柳になつては居るが尙ほ『情なや
枯木』『親は賣り』『聳念佛』等の依然元祿川柳の名残りを留めて
居るのがあり、『Hにぬれて』『人の目』『牛込』等、是れ亦た貞門俳
諧から系統を引き、後の狂句の伏線に爲つて居るものもある、かと思
へば、『慇懃』『退屈』『ねむたげ』『置直す』等の佳句もある。『錠は
びん』などと元祿其儘の拙劣極まるものは、明和期で『娘に錠を
おろしに來』と作られ、『のべ紙で草を押へりや脇で鳴く』も、明

和期で

押さへればすつきはなせばきりぐす

といふ句に作り直された。ともかくこの『俳諧あづまからげ』は、寶曆明和の露はらひとして、川柳に親しむ者の忽諾に附すべからざる珍書である。

第四章 寶曆の萬句合

寶曆明和の前句附の隆盛が、元祿寶永以上といはれるやうになつた理由は、時代の相違といふこともあつたらうが、私の一家言として言はしむれば、江戸の俳壇が、いたづらに江戸座雪門の誤れる傳統氣分と守舊根性とが、恰かも大正昭和の川柳界に守舊派なる者が、たゞ古川柳の模擬に浮身をやつし、人心をして倦ましめるより外、能の無いに満足せず、革新川柳、新興川柳が勃興せんとするが如く、芭蕉の殘涎を嘗め、其角の餘蘊に倣ひ、千篇一律、毫も清新の氣無きに慊たらず、この雜俳前句附に向つて、その磊塊の氣を吐いた

寶曆明和の
新興川柳

故では無からうか。好事の射利心、懸賞の賭博趣味もいくらか手傳つて居たらうが、この寶曆、明和の前句附應募者即ち古川柳の作家達を、悉くそれだとして仕舞ふのは、近眼者流の短見である、それで無くて、高の知れたる懸賞の阿賭物で、此の如き、とにもかくにも江戸時代唯一の市井詩人をおくも、多く釣り出すことが出来よう筈が無い。元祿時代には東には芭蕉をはじめとして、その一門の豪俊其角、嵐雪を筆頭に、客位に在つた素堂、西には西鶴、鬼貫、來山、才磨、其他が居て、俳諧俳句の全盛時代、なか／＼以て前に掲げた同時代の前句附など齒は立たない。それがこの寶曆、明和の時代に至つては、殆んど俳人らしい俳人は居ない。前句附の點者となつて、不朽の名句を選択し、後昆に傳へる役を承はり、其名を其物の名とまでした柄井川柳も、俳人としては名も無き雜兵であり、また其天

寶曆明和の
俳人

稟の奇才が、俳人社會の因習、固陋に堪えずして、之を脱け出し、専ら前句附の選者と爲つた、といふ説がある。

めつ かつちの蛙 桂馬に飛んで行く

といふ句は、この川柳が、其師家たる雪中庵から破門された時の句だといふ。但しこれは事實としては證據薄弱、後人の捏造とも見られるが、ともかく右の通り俳壇に人が無かつた。この柄井川柳も、前句附の點者としては、選眼古今獨歩であるが、其作句としては、一も佳なる者を傳へず、たま／＼彼の作として傳へられて居る者は、平凡拙劣なる月並俳句である。且つ俳人が前句附の點者となることは、元祿時代に其角や來山すら之を爲した先例がある。俳人社會を脱出しなくともそれは出来たのだ。「めつ かつちの蛙」の正體も何だか怪しくなるが、そんな詮索するのが本書の目的で

は無い。

而して、この柄井川柳が、前句附の選者に爲つたことは、我川柳興隆にとつての一大衝動で、彼と同時に前句附點者たりし俳人には、露丸、南華坊、机鳥、菊丈、白龜、黛月、如露、桃人、錦紅など殆んど二十を數へるほど名が見えて居るけれど、其人達が當時の俳壇にどれだけの位地と勢力を有して居たか、といふやうなことは不明である。古人に對して、みだりに臆測の月且は出來ないけれど、さしたる俳人では無かつたらうと思はれる。而して此等の選者が抜いた句を川柳が抜くことがある、これは今日でもあることだが、川柳は之について斷はつて居る(前句配布の摺物で)

一、私不才のものゆへ故事古句存不申候

一、御句類句にて突き合候御句御座候共御趣向よろしき御句

の方勝句に差出申候依之類句は一切構不申候御同句は出し不申候(勝句は選抜句、同句は暗合或は剽窃)

眞面目な文學趣味の投句家ばかりでは無かつたのだらう。

寶曆七年に、はじめ、初世川柳選にかゝる川柳雜誌(月三回の二枚或は三枚四枚、五枚の刷物)『前句附萬句合』が發行されてからが、私どもの稱する寶曆明和期で、所謂古川柳全盛時代である。この川柳雜誌(便宜上、さう呼ばして貰ふ)は、ひとり柄井川柳其人だけが發行されて居たので無く、他の點者のも刷物となつて顯はれたが、川柳のは(句の下は組連の名、人の名では無い)

未十月廿五日開き

萬句合惣高壹萬八百拾六員 五まひ板行

川 柳 評

前句附選の
第一人者柄
井川柳

命なりけりく

○にくい事かなく

合印

禮

▲おとしこそすれく

×よいかけんなりく

そろひけり

楠も末世へ出ては齒がたゝず

二千百四十三頁

山下

薩秀堂櫻木

×本ぢんは地ひゞきがして夜が明ける

一千四百五頁

神田辨慶橋

武藏坊

佐殿は朱にまじはりて白く成り

芝宇田川町しん道

一千三百六十四頁

近江

けんとうし東まくらにとこをと

市谷田町

はつせ

×ゑちこやへ行て浮き繪の數に入り

一千二百三十三頁

飯田町中坂

にしき

×□□くらへ來ぬので彌平兵衛なり

一千二百二十七頁

駒込片町

老まつ

○組みうちの間ダに馬は草を食ひ

淺草しんぼり

若まつ

○きつね火の折々野路をほこころばし

山下

さくら木

かなぶみにくづして遣ふいろはぐら

麻布四千堂

まつかえ

衛士の火へかなはぬふみをなけたまふ

神田

むさし坊

×嫁十四むこ十七を公家のゑん

芝

あふみ

鳳凰はいちのめかけの夜着の紋

市かへ

はつせ

○やかたから人とおもはぬはしの上

いゝ田町

にしき

○しま原の女郎は公家のはだかを見

芝金杉

青柳

○けいせいは遣りちからなきもらひやう

芝二本榎

水せん

○嫁取つてめつらしそうな手を引かれ

牛込かくら阪上

さかき

○去り状を能くく見れば女の手

本所石原町

龍門

×御菜の子うたが上手で御氣に入り

芝口源助町

朝日

▲人別を間引かれるまでうかくし

淺草三島明神前

井垣

- まんざらな腰を禿はおしならひ しんほり 若まつ
- ×まきがりの手がらは足が天上し 同
- 關守りの内で見るのがほんのかほ 麻布 まつかえ
- ×地諷はつくねたやうにかしこまり 芝 青やぎ
- てうちんで參る大師のいらひどさ 芝 水せん
- ×干し□を二ツならべて草の庵 駒込 さまつ
- うつゝにもうちはのうごく蠅きらひ 同
- よし盛は世帶くづしを申し請け 同
- 居つゝけのさか桐とまで城が落ち 同
- だき上げる手にとび梅のもうにほひ 同
- ふみ使ひ引きさく迄を見てかへり 飯田町 にしき
- ▲角力とり不首尾は内で行水し 同

- ▲蜆とり子供に蟹を投げてやり 同
- たまご程うしろへひちの美しくしさ 同
- ▲宗桂の二十ならべた事はなし 市ヶ谷 はつせ
- 心見といふがおごりのはじめなり 同
- 醫者衆は辭世をほめて立たれたり 同
- 五六人かざす扇子のすさまじさ 同
- はつ鯉嫁のばかりは醬油で煮 芝 あふ美
- ×たいこ持ち一トはねはねてかへりけり 同
- ▲色ごとに羽ネのはへたる清水寺 同
- すいたのが來りや抱いた子とほうをすり 同
- ×蟬丸は他筆を持って歌をよみ 神田 むさし坊
- 壁訴訟ひげを抜き〜聞て居る 同

- きれふみをたん氣な娘ぼつともし 神田 むさし坊
- 初産をこわくいていしゆだいて見る 同
- 白拍子死に身の中でひらしやらし 山下 さくら木
- × 木薬やでつちくらひは内でもり 同
- ▲ はな紙へ蛙だきつくうばが池 同
- 關守はしかつへらしくよめかねる 同
- 穴藏へ氣つよい嫁は一人下り 同
- × 針妙の手の軽くなるほとゝぎす 同
- 同じ間をはじをふるもふ御師の膳 同
- × 賀の祝ゆづりの目がねかけて見る 下谷三味線堀 花 筏
- × 橋杭はしやうりやう様の馬とゞめ 四谷北伊賀町 梅かえ
- ▲ 名だいにあやまつて居る猿廻し かうじ町三丁目 たつた

- × 江の島で七日ひもじい座頭の坊 芝 青やぎ
- よし町の外を和尚はそつと云ひ 芝 あふみ
- × 西ひがし角力のやうな堂づくり 神田 むさし坊
- × 碁仲間は今日は幾日がくせになり 山下 さくら木
- 赤兎馬を貰ひそろく逃仕度 本所 龍もん
- くづの葉ははだしに成て穴がしれ 小石川 大和
- × 唐僧はしつかりものて法事をし 市谷 はつせ
- ▲ 寒念佛たゝくを見ればきせるなり 麻布 まつかへ
- × 小きみよく男禿は小便し 飯田町 にしき
- 藪入は主の氣で出る日からかさ 神田明神下 八はし
- 女房を小聲で叱る持參金 芝口 朝日
- 乳母をかしなといへばあかんべい 芝 水せん

馬喰町ではさるのへど

芝 水せん

○名代を取てさはぎにねんが入り

牛込 さかき

▲黒木うりまけぬあたまをおもくふり

同

×桃太郎先づ遠吠を三聲させ

麻布 まつかへ

▲石塔の赤い信女をそゝのかし

市谷 はつせ

○なぶられる朝は二人が先きへ起き

同

□本ぶくの元トの如くにしわくなり

同

×乳母がおや日傘の下で咄して居

同

目うつりがしてじやもを上げ

同

○料理人犬と猫との靈がつき

同

○大江山さゞるのやうなあごばかり

芝 あふみ

○盃が來るとげいしやは三を下げ

同

×けんへきにいぼゆびのある神道者

同

×猿田彦逆かさに持つて箆を吹き

同

×米つきははしで二の字を書て喰ひ

麴町 たつた

×本ぶくの比丘尼は結ふて見たくなり

駒込 老まつ

○ほゞづきを吹きく女房去られて出

同

×料理人一ツ出してはのぞひて見

同

かつ手から來てそつと行き

同

▲三味線にあとをいはせてさゆをのみ

同

八朔に出る雪をんな

同

×女同士御客といへば通用し

同

桶ぶせは淋しくなると首を出し

四谷 おのへ

×掛り人乳母の食ふ内しやべつて居

神田 むさし坊

▲大江山くらひ物からつけこまれ 神田 むさし坊

十ヲとちかはぬ太子講 同

×大江山壺をあけるに好い手付き 同

×うばが宿はなしがつきてめしを食ひ 同

ぬすみ喰 東方朔が元祖なり 同

三井の見世でそばを買ひ 同

○母親と思ふておのれはぐらかし 同

○切落し油断のならぬ立すがた 飯田町 にしき

○棒つきはしやうことなしの顔ツつき 同

×四五度び目師匠はばちでどうを打ち 同

×くし巻きにするは仁王か元祖なり 同

×さぼてんの先生もあるあすか山 山下 さくら木

▲かみ置のひぎは風呂敷かけて食ひ 同

×顔見世は日が短かいが口に付き 同

○火なわうり来てはつツ突きつん廻し 同

○うどんやはしやものゑ入をにらめて居 同

○元日の夜は氣の知れぬ人通り 同

×竹の子の冬出るほどのりちぎ者 同

母の名はおやじの腕にしなびて居 同

○草り取り内義のねめる御供をし 同

まくをしぼつた尻ツ付き 同

○萬度持ち生れもつかぬあるきやう 同

▲けいせいのかくつゝ笑ふはした錢 同

×つり臺の中へ鼻紙ほうりこみ 下谷 花いかた

- ×ぬり物師すてつぺんから引かぶり 小石川 やまと
- さるた彦目玉のついたがぶとを着 淺章 いかき
- ▲米つきは一トきねに首二つふり 芝口 朝日
- 小兒醫者からくなどをもふつて見せ 同
- ×内裏雛はらわたまでがはかまを着 芝 青やき
- こうじうりあらしの屋根の音をさせ 同
- ×まへ帯にして御局へ御禮に来 同
- 女がた樂屋へ行つて聲がはり 麻布 まつかへ
- げじくは二疋ならんでやうな紋 同
- ものかはのまた上を行くうそのかは 同
- うぬぼれはかぐみを出してにこはごし 同
- ×銅杓子しやに構へ打つ舌つゞみ 同

- 鬼子母神下されましよの立すがた しんぼり 若まつ
- またくらにぬか袋程角力とり 同
- ▲綿ぼうしだけは佛師も心得て 同
- ×きらず汁人目も草もかれてから 芝 あふみ
- 日待月げいしやの妻は後家のやう 同
- 殺されてかたじけないも醫者の禮 同
- 仲條かつんほで外に人だかり 同
- 泣き出すうばはたがやとろつぱんし 同
- ▲ふせぎ矢は乳母が合點で仕り 同
- ×不動尊せなかのさむい事は無し 同
- ×部屋方は柳さくらをこきつかひ 同
- ×おはぐろのだちんに一本しやぶらせる 飯田町 にしき

- ▲ 討死といはで去狀きれいななり 飯田町 にしき
- × 目の玉へかうやくをはる肴あり 同
- × 椀箱といつしよにかりる小さむらひ 同
- × たんと有やつはりつぱにぎりをかき 同
- 納豆賣のヒかげん 同
- × わづらつて人なみにくふ信濃もの 駒込 老まつ
- 猿廻し座敷の上へつゑをつき 同
- 居所を聞て母親めしをくひ 同
- × ぬり桶へひちをもたせてまつて居る 同
- ▲ 五郎丸さがみ川から追ひだされ 同
- ▲ 綿うちとくるつた娘急度知れ 市ヶ谷 はつせ
- × いなかむす紋など付けたおびべを着 同

- 釣の二朱さけすむようで尻目で見 同
- 大がたり是いばらきか元祖なり 同

五郎をとめて幕を引き

- ▲ 道成寺むほん勝負ないのりよう 同
- × 約束の戸は二つとはたゝかれず 神田 むさし坊
- 不動さま小粒のやうな牙がはえ 同
- 浅草寺ふだんごふんの雨がふり 同
- × 百姓は正月をさへ手作にし 同
- 女鬼虎の皮をばふたのにし 同
- × おやぢへは古今無双なうそを賣 同
- × 目がね賣年をしらべて荷をおろし 同
- 江戸の馬士馬をひかねば犬が吠え 同

- 茶の給仕いかなる譯か二度と出ず 神田 むさし坊
- よめ入がいやとははゝのきめところ 山下 さくら木
- 黒助はいなり仲間のいろをとこ 同
- 猿田彦からしがきいてにぎつて居 同
- ×よし町の時計も客にそふおうし 同
- 大門で坊主にしたる枝紅葉 同
- 女中から夜の明けかゝる花の朝 同
- ▲美しい顔で地内のせんたくや 同
- 此部屋にひとり寝ますと氣をもませ 同
- りん氣から下りるはしごは家鳴りがし 同
- 病上り遊びに出るも恩にかけ 同
- ×腹をもむ座頭に琴のすがた有り 同

- ×病上りひと口つゝにゆるされる 同
- ×根津のさう榎わりかけて間イに出る 同
- ▲あがり湯でかゞとへかんなかけて居る 同
- 料理人つくばつて居てかいこまれ 同
- 御夫婦の御中がよいとうばがふみ 同
- 大尾惟もちがつめるあたりは虎の皮 同

×番勝句三百七員

後會御句來る十日迄取次方に御遣可被下候以上

一萬八百十六員といふ多數の投句から、柄井川柳は三百七句だけ撰抜したのである(書方の不明なのや、鄙猥なのを十數句除けたが、ともかくこれが全部である)この巻は酒田の有志家某氏から送られて、原本は私が持つて居る。大正十二年の大震災に悉く焼失

したあとへ始めて接手した萬句合だから、これを特載した。この萬句合は、寶曆十三年十月二十五日開卷の物である。川柳評の萬句合は、寶曆七年から、毎年必ず八月五日に初會を開き、十五日、二十五日、九月が同じく五日、十五日、二十五日といふやうに十月、十一月も同様、十二月が五日、十五日の二回で終卷となつて居る。時にはこの規定通りにいかないことも有つたが、たいがいはこの通りで寛政元年川柳死去の前年まで繼續された。その八月五日から十月二十五日まで、少ない時は二枚摺り、多い時は九枚摺り（下部に「五まひ板行」とあるのがそれだ）で十四回出版される。それを一號、二號といふやうに數へない。天満宮梅櫻松仁義禮智信鶴龜叶といふ十四字を、一字づゝ相印として之に命名して居る。この萬句合は十月二十五日だから即ち「禮」の相印に當る。これは毎年變化無

しで、さて「命なりけり〜」といふやうなのが、四行に書いてある。これが點者から出した題で、其上に○▲×の符號のあるは、抜句（所謂勝句）について、題と照見させる爲めだ。こゝろみにこれに略解を附して、前句附の附け方なるものを研究して見ようか。

さて第一の「命なりけり〜」の前句を見る。「末世へ出ては、楠ほどの人物も、競はぬ南風をどうすることも出来なかつた、天なり「命なり」といふのだらう。「佐殿」は頼朝、「朱に交はり」は阪東八平氏の中へ流されながら、平家の赤きにはならず、「白く成つた」といふ、狂句のやうな川柳だが、「命なりけり」命があつたればこそと、前句としてはよく附いて居る。傾城のふみならぬ「かなぶみ」に身を持ち、「くづし」澤山有つた「いろは藏」をめちや〜にした。これは「命なりけり」長生きをしてよくなかつたのだ。和田「義盛」は、木曾殿の「世

帶くづし「巴御前を申し受けて妻とした巴に命が有つたればこそ」と附けた、「醫者の薬も、もう利かない、「命なりけり息は絶えた、いや立派な大往生でござつた、またこの辭世はよく出來ました、としよさいなければ、そんなことをいふ、悲哀の滑稽、若い女のうしろ姿、袖の八ッ口にこぼれるやうな緋が見えて、ちらりと出した白き臂、たまごのやうに美くしい、こゝが女の「いのち」である、美人の生命はこゝにある、「すいた男」への嬌態を、抱いた兒に托す戀愛人の「生命」、「芥川は貴女を背にして、駈落の在原業平、「黒助は「吉原」近くに祭られた「稻荷」大明神。

第二の「にくい事かな」の前句を見る。「狐火」の、恰かも夜の暇近く、闇を「ほころばすやうに見えつかくれつ」の「憎き狐よ」といふ附け方、「鳳凰帳裏に眠る寵姫は楊貴妃か、夜の隅田の夕涼、「屋形」

前句附の作
り方

船から「橋」行く人の何かとあて言の冷罵を浴びするを、フンあいつ等をオレ達は「人と思はぬ」と相手にしないブルジョア階級、どつちも「憎い」、「島原の女郎」は「公卿」の相手にも出る、「嫁に手を引かれ」る姑婆、「去り状」を良人に代つて書いてよこした「にくい女」どこの牛の骨、馬の骨、「うつゝ」ごゝろに「團扇動」かすは、須叟も「蠅」の「憎き」を忘れない日本の歐陽公か、「ふみつかひ」が來て男からの縁切状を渡した時の、その女の「憎み」哭ふ恐ろしき顔よ、そのふみも「引き裂」きて……女房の「壁訴訟」を腮の「ひげ」をぬき、聞いて居る面ラにくさ、「死に身」の戦陣の中に、ひらしやらする「昔の藝者の「白拍子」、男でさへも氣味の悪る「穴藏」へ、女だてらにづか、下りる「嫁」、金の高下ですゑる「膳」に高下をして、同じ室で「耻」をか、せる伊勢の「御師」、「赤兎馬」といふ名馬を曹操にもらつてこの馬ならば千里獨行

が出来ると、逃支度をする三國志の關羽、小聲でそつと叱るほど良人をへこませて居る「持參金」つきの女房、わざと朝起きをしてなぶられ「まいとする新婚の二人」、「榮螺」のやうな腮をして居る「大江山」の鬼、「ほゝづき」を鳴らして、平氣な顔で三下り半を貰つてさつさと去られて行く不貞腐れの「女房」、「元日の夜を」通る「人」、舞臺では、あんな嬌態をしながら、樂屋へはいると、あんな「聲がはり」をする「女形」、戀の貴婦人が「待宵のふけ行く鐘の聲きけば飽かぬ別れの鳥はものかは」と詠み待宵の小侍従の名をのこし、相手の使人にまでも「ものは」の藏人の異名を興へたはいにしへのおもひもの、今のおもひもの、おめかけは、「ものは」どころか「うそのかは」と狂句式の洒落を云ひさうな女などいづれも「にくい」人々では無いか。その外「日待月」は御座敷多く、いつも外泊する幫間の妻、

さながら後家のこゝろもち、その客をさへ「にくむ」だらう、見す見す藥ちがひか、見立ちがひで殺された親の敵か、子の敵かの「醫者」に「禮いふ時の」にくいこと、「虎の皮を」二布（女の禪）にした女鬼は「にくい」よりは可笑しいところに附合の妙はあるが、獨立の句として拙極まる、「江戸の馬士」の「馬を引かすして」犬に吠えられるは、犬が「憎くむ」のか、犬を「憎くむ」のか、大笑ひだ、「女中」が「夜明」けぬうちからの花見騒ぎは、其現金さの「にくい」のだらう、「この部屋に獨寝ます」は、こゝろにくいといふ程度である、「遊びに出るを恩にかける」病後の人は憎くらしい、といふ寧ろ好意の憎み、乳母の目で見た其主人の娘が、花嫁となつて、花聲と仲のよさを書くのは妬ましいやうな、さびしいやうな、うれしいやうな、可愛いらしいやうな「にくみ」だ。

第三の「おとしこそすれ〜」は「落し」だらう。「人別を間引かれる」は、出産届の手「落」か、「角力とりが場所で足を洗はず、内で行水」するのは人氣の「落」ちることになる。「蜆を取つてゐる時に、蟹を生捕つた」、「子供のおモチヤにさすべく、投げてやると、しまつた、水に「落」ちた、「色事に羽ネの生ゑた」は清水の舞臺から飛ぶ失戀の自暴か、得戀の祈願か、ともかく飛べば「落」ちる、「池へ「落」した鼻紙」を蛙が浮き上つて、其紙へとり付いた、「寒念佛」が「鉦」を「きせる」で「た〜く」手が凍えてそれをとり「落」した、凍てた石のやうになつた道で、鏘然として音を立てた。頭に薪や花をのせて居る所謂「黒木賣」の大原女が、價を負けると値切られても、負けないといふ「首」さつさとはふれない、ゆつくりいや〜をしないと、あたまの黒木が「落」ちるからだ、「石塔の赤い信女」、良人の墓へ戒名を彫られ朱が入れてある後家

さんをそゝのかして「墮落」させる不屈者もあれば、「三味線」に歌をうたはせて聲を「落」し、加之ゆつくり白湯をのむ藝人もある。「暴風」の日に、家根へ木の實の「落」ちるやうな音をさせる「麴賣り」の商人が居れば、「討死」と覺悟しながら、それといはずに妻に「去り状」を渡して「落」ちて行かせる武士が有つた。

第四の「よいかげんなり〜」のを見る。「本陣」は驛の大旅館、大名の參觀往來には、必ず宿に當てられる、其の大名の泊つた朝は、地響きするほど騒がしい、「よい加減」にして置けばよいのに、「越後屋」は、今の三越呉服店、昔も今も肩摩轂撃、人いきれがさながら「浮繪」のやうだ、いゝ加減にして置かないと病人が出来る、怪我人が出来る、源頼朝を命乞で助けた清盛の繼母池の尼の生んだ平頼盛、頼朝鎌倉に居を構へ、平家追討の師を出す時、舊恩を報せんと之を

鎌倉に呼んだ、頼盛は承諾して鎌倉へ赴いた、其の臣彌平兵衛宗清之を近江の國まで送り、東西に別れ、自分は西海に平家と運命を共にした、宗清は頼朝其の他義経など多人數を救助したのだ、而も鎌倉へ下つて、頼朝の報恩を受けようとしなかつたのは偉らい、「好い加減」に、あちこちをごまかす人間とはちがふ、ともすれば「好い加減」に二股主人の頼盛と縁を切つた、とも取れる、「地諷」は、「好い加減」な場所へつくねたやうにかしこまる、「たいこ持」は一と騒ぎして「好い加減」にかへり去る、「蟬丸」の「これやこの」も、自分は盲目だから、「他人」に筆して世間に発表したのだらう、といふつまらない句、「精靈様の馬」が「橋抗」へ「好い加減」に引かゝつて居る、「桃太郎」が供に連れた犬に命じて「好い加減」な時に吠えさせる、「三聲」が合圖だ、「好い加減」に「料理」して出して、どんな顔をして食つてゐる

かとのぞく、「女同士」の「御客」は「好い加減」の名で、ハッキリとは云へない、「仁王尊」のあたまは女の「櫛まき」といふものに似て居る、あらたまつた髪でなく「好い加減」にぐるぐると結つたものが櫛巻、其の他の×印の句へ「好い加減」を當て、見れば、思半ばに過ぎる推想が出来やう。

「そろひけり」は冠附で、

「そろひけり」八朔に出る雪女

として、吉原の八月一日に遊女が、悉く白無垢を着たのへ利かせたのだが、これはだんく、十七字句の隆盛になつたのに反比例して、明和になつては、追々衰へて行つた。これを見ても遊戯的な句作が永い生命の無いといふことはわかる。もつとも今日も「冠附」なる文字遊戯は行はれてゐるところもあるが、新興川柳人間には勿

論、傳統に遊戯する川柳家も流石に之を取り扱かはない。下の下の物と爲つて居る。乍併、この「冠附」を行つて居たものが、一朝悟る所が有り、一躍して革新川柳へ來るやうな奇觀もある、蓋しそれは今日の話で、江戸の話では無い。

第五章 明和の萬句合

いちがいに寶曆、明和の萬句合前句附を以て江戸川柳の全盛と云つて居るが、その寶曆と明和とは、自づからの差別がある、所謂時代の變遷もあらう。興隆期と頽廢期とに各々の特色があらう。寶曆時代は興隆期だから、純正質實な趣きがあるかはりに、元祿以來の稚氣童心が抜き切らない。明和になつてはじめて天衣無縫(比較的に見て)眞に古川柳の古川柳たる特色が見える。全盛中の全盛時代と謂つて可い。安永、天明でやゝ頽廢して、寛政以後の墮落期に入るのである。同じく柄井川柳の撰評しもので有つ

稚氣童心が
抜き切らぬ

ても、寶曆は寶曆、明和は明和、安永は安永、天明は天明と、大に句風變遷の跡が見える。其一代を私は假に稱して、興隆期、全盛期、頽廢期といふ。江戸を唐一代に見立て、寶曆、明和、安永、天明の柄井川柳在世年間に江戸川柳の盛唐期と稱し、それを更にこの三期に分つことが出来る。委細は追々に説明することにして、こゝに明和の萬句合を紹介する。明和六年丁丑十月五日開卷の物である。これは私が明治三十六年七月、始めて日本新聞紙上に新題柳樽と題し川柳新興の聲を揚げた時、社内の先輩古島一雄翁が貸してくれた萬句合の内でも、つとも私の心を曳いたものである。

丑十月五日開キ

萬句合 惣高七千四百六十五員 四まひ板行

川柳評

相印

仁

引つ張りにけりく
 ○すましこそすれく
 ▲めつそうなこたく
 ×きつゝい事かなく

×ほとゝぎす二十六字はあんじさせ 市谷田町初瀬
 ▲富士山も駿河はあまり舞臺ざわ 芝宇田川東横丁近江
 生酔のせまさうに出る仁王門 山下薩秀堂櫻木
 ×小百兩灰にする夜の御涼しさ 赤坂一ツ木町松葉
 ○御引馬どしやう骨から風起り 市谷田町初瀬
 ○金屏風元が元だと借りにやり 四谷大木戸かすみ
 ×御うたゝ寝狎の口へも手をあてる 山下櫻木
 ×投げるなといふは涼みの相撲なり 芝二本榎水仙

傾城のふみに女のよりたかり	本郷四丁目北	國
奥家老日も夕陽と申上げ	麻布櫻田町	かつら
×朝歸りそりやはじまると兩隣り	芝	近江
×僧正は大かみなりが相手なり	同	同
うかゞひの上で家老を胴につき	同	同
内ぶんにしてとふるへる顔二ツ	市谷	初瀬
▲本性になつて三味線ついで見る	同	同
▲やかましいわけは二人が他人なり	同	同
○無いふりが金持至極上手なり	同	同
×朝歸り佛の前へ引きすられ	同	同
×まな板へ手裏劍をうつ料理人	芝	近江
頼政は内裏で賣れた男なり	同	同

○もし聞かば番だと云つてくれたまへ	市谷	初瀬
×三日目に坊主で歸る狐釣り	同	同
×日本橋あけくれ運こぶうろくづの	同	同
▲十三日鏡を出して叱られる	山下	櫻木
○若殿は或夜土手にてぶたれ損	同	同
▲兩替屋五兩足らぬに驚かず	木挽町	えびら
×立ち聞きに持った十能の火が起り	麻布	かつら
▲娘見に來たとも見える雨やどり	青山	まかき
▲うなされて丁稚三ツ四ツ蹴飛ばされ	八丁堀	かぶと

勝句は二百三句あるが、これだけで以下は略する。他の萬句合からいくらづ、抜いて説明することにするのが可いと同時に、すでに前章の寶曆十三年ので、大體萬句合の體裁は讀者に了知された、

と思ふからだ。さて例によりて、「引ッ張りにけり〜」は第一が「生酔の」で、たとへば淺草の仁王門のやうな雄大な赤塗の門から、醉漢が左右の人に助けられつゝ千鳥足で、門いつぱいによるけ出るといふ大きな句、左右の手を「引ッ張る」といふところが附け方、「傾城のふみ」は素人の女が、たとへば吉原通ひの男の妻が、良人へ宛てゝ敵娼から來た艶書をひそかにぬすみだし、こゝろやすだての女仲間に見せる、いくらか良人自慢もある、女仲間は「女郎といふものは、どんなことを書いて、客をだますだらう」とめづらしいやら、面白いやらで「引ッ張り」合ふて讀むといふ附け方、「奥家老」は、大名の奥方の遊山の供奉をして出た、女中達は、外めづらしく夢中になつて日のくれるのも知らずに奥方の成る可く長く遊んで居らることを望む、それを年配のはげあたまの奥家老は、奥方の御袖を「引

張り」すでに「日も夕陽と相成りまするで」などと切口上で申し上げるの意、「うかゞひの上」は、何かこれも大名の御家に、御目出度い事がある、無禮講で、御家老の胴上げをしよう、と若侍がしめし合せはしたが、さて突然にやるも何とやらで、家老の袖を「引ッ張り」胴上げの伺ひを立てるといふ滑稽、「内ぶんにして」は必ず有夫姦とは限らない、所謂男女媾曳の現行を押へられたのだ、不義者見つけたといふところだ、その見つけ人の袖にすがる「引ッ張る」どうぞ内聞に、とたのむ、「頼政は」云ふまでも無く、詠史の源三位で、鶴は射る、歌は詠む、文武兩道の風流男、宮中では「引ッ張り」だこたつたらうといふこと。其次は「すましこそすれ〜」は第一が「御引馬」の背に立つて居る御幣が、風になびいて居る、それが恰かも馬のどしやう骨から出た風のやうだ、馬の得意面ラのすまし方といふ説

も聞いたが、それで無くたゞ御引馬の鬣を風が分ける形容だと思ふ、さうして神幸も濟むといふ附け方だらう、「金屏風の借物ですます其店、「無いふり」をすれば、先づ出さずに濟む、「もし聞かば」は、女房へ友達から云つて貰へば、其夜實はよろしからぬところへ行くのだが、それがばれずにすむ、といふ附け方。吉原通ひの「若殿」のが戀で、いりて、土手でふたれたが、表向へ出すことも出來ず、泣寝入ですまさないければならない、といふ附け方。

其次は「めつさうなこと」。「富士山」を近くで見た感じ方、「三味線」を踏み折つて酔がさめた時のこゝろもち、煤拂ひの「十三日」によごれた面ヲを鏡で見る人間の氣持、「兩替屋」では五兩の金を五百ほどにも思はない習慣性、あの「雨やどり」はウチのアレを見に來たやうだ、めつさうな話しさ、泥棒だ、なぞと飛んでもな

前句の附方
細説

い寝ごとをいふ「丁稚」が蹴飛ばされたと云つたやうな附け方。其次は「きつい事かな」第一の「ほとゝぎす」上五文字には、そのほとゝぎすといふ鳥の名を置き、そのあとの七字、五字、七字、七字が大變だといふ附け方、「小百兩」を灰にする、御ンとあるから貴人納涼の夜の御遊興、きついことだ、といふ附け方、「御うたゝ寝」狎を叱ることも出來ない、殿様よりも奥様とした方がよい、その御うたゝ寝を驚かすことを恐れ、しづかに狎の口へ手をあてる、いや大層な權式だと附けたのだ、「投げるな」は、涼臺をはなれ、浴衣がけ、團扇を帯へさして、「どうだ一丁行かうか」と取組んだ、「が、オイ投げちやアあぶねいぞ」と大變な騒ぎといふ可笑味、「朝歸り」ともかく夫婦で、一と喧嘩なくてはすまない、大變々々、「僧正は詠史だ。延喜年中、京都王城の地にはげしい雷鳴、是れ菅公の冤靈雷神に化するなり

と、怯ぢ怖れ、菅公生前に師として居られた、延暦寺の法性房を朝廷へ召されて、かみなり除けの修法をさせられたといふ俗説、かみなりさまを相手にするのは大變だらう、と誇張したのだ、「佛の前へ引きすられ」これは大變だ、ゆるして〜、「まな板へ」庖刀を手裏劍のやうにうちこむ料理人、「三日目」で坊主で戻る狐ばかされの面ヲを見ろだ。「日本橋へ」各地から運び込む魚の數、大層なものでは無いか、「立ち聞き」が、その密談をきいて居ると、自分にかゝる事、ぶん〜らん〜として腹が立つ、十能の火が起る、きついことだ、といふ附け方である。解評は先づこれ位として、御約束の、他の萬句合から二ツ三ツ附け方を御参考に供しやう。

『氣味のわるさよ〜』の前句

小侍 切腹しろと脅される

古寺にこいつと思ふ猫一つ

は、聊か附き過ぎて居るが、句は面白い。「めつたやたらに〜」の前句

蒸 鰯 肩を替へると黒くなり

御引馬屁もいさぎよく放りちらし

の如きは、附け方としては實に所謂附かず離れずの規定にはまつたものだが、句はさやうに面白くない。「わづかなりけり〜」の前句

楊枝見世せんたい無理な腰をかけ

花 嫁 も 塵 に 交 は る 十 三 日

は、ちつとしか無い店先きへ腰をおろす自然の可笑味、「塵に交はる」は花嫁の煤掃を言葉で美化したもの。「わづかなりけり」が二句

附き過ぎと
附かず離れ
ずと

とも活きて居る、『そねみこそすれ』の前句

女房は土手のあたりで髪がとけ

御不縁のもととは姐妃のしわざなり

間男をせぬを女房は恩にかけ

附け方も平凡、句もさして取り立て、云ふ程でも無いが、土手のあたりで髪がとけは、吉原さして眞一文字に走る女を、目のあたり見るやうだ。芝居が、りの句といふのだらう、姐妃は必ずしも殷の紂王の後妃を詠じたわけで無く、殿様の寵愛に誇る御部屋様を指したのだ。「間男」の句は附方と共に平凡中の平凡。「つがもないこと〜」の前句。

四天王どれも一人は荒つぽい

食傷を毒害したと姑婆

古川柳獅子
身中の虫

頼光の四天王で、阪田公時、その他義仲、義経、義貞、いづれも四天王の中には赤面で、動きのとれないやうな衣裳を着て、『つがもねえ』と威張るのが一人は居る、といふのか、「食傷」の句と共につまらない句の骨頂で、元祿前句のほひが抜き切らぬばかりで無く、古川柳をして大に安ッぽからしむるものだ。蓋しつがもねえ句だから、つがもねえの後句には、うまく附いてゐる譯か。「あまいことかな〜」の前句

わが耻を娘に話す嫁入前

あの蓮へかう居やせうと腐りつき

天蓋は戴き天を戴かず

はいづれも揃つてあまい句だ。「あの蓮」に至つては、池に蓮のある出合茶屋の二階で、どうもいやはや見ちやア居られん、といふ甘さ

だ。「天蓋は」普化僧に化けて敵をたづねて歩くので、これも大にあまい、とり立てるほどの句もないが、つまらないといふうちに、かなり突ン込んであるところは、たしかに寶曆明和である。「なくさみにけり〜」の前句

日の永い事と杉戸へよりかゝり

玄關をばがらあきにして風を揚げ

御預かり申して置くと勝つた奴

三年は立たせぬと下女荷を仕舞ひ

は、いづれも申し分無い佳句だ。「日の永い」玄關をばは自らなくさむので、「三年は立たせぬ」と憤る「下女」は他からなくさまれたのだ。「御預り」は手なくさみといふ所謂博奕袁彦道のたぐみだらう。「しだらくなこと〜」の前句

本性をたがへぬ男由良之介

下手將碁袖をひかれて睨め廻し

の「本性」は、付き過ぎて居る上に、獨立の句としてもまづい。「下手將碁」は、いかにも自墮落なところを隱約の間にあらはして、しかも滑稽の上乗たるものだ。「ひさしぶりなり〜」の前句

盆ござへ横に寝たので二分になり

皮羽織素肌に着てと母は泣き

久しく土地を賣つて居たのが、何年ぶりに戻つて来て、たつた二分で、盆ござに引くりかへり、體を張るといふけちな博徒、たしかに川柳の好材料、後はたゞ人情味のある句、といふだけだ。「氣味のよいこと〜」の前句で

呉服店かついで来ては投げて行き

どなたから出ますかと聞く大一座
初松魚落つる涙のひまよりも

は第一の「吳服店」がいちばん名句で、どしりといふ音を聞くやうだ
實に氣味がよい。「どなたから出ます」は「ウン乃公が出す」と引き
受けて勘定を下げる時の氣持はよからう。「初松魚はその痛快に
して餘韻ある。この點は前句附なるが故に、と古川柳に感謝した
いところだ。『ながめこそすれ〜』の前句

前句附なる
が故この
佳句

美しくしい儘で小町は死にたがり

まだ若いからと遺言綺麗なり

前者は「ながめせしまに」の百人一首の小町の歌からヒントを得、後
者は、將に死なんとする若き良人が、美しい妻の顔をじつとなが
め「おまへはまだ若いから、後家など立てなくても」といふ、綺麗と

殊更にことわつたところに、特に綺麗さがある、前句の附け方に
いろ〜あつたところが首肯される。「見合せにけり〜」の前句

口説かれて娘わたしは嫌らひだわ

かゝり人火焰の燃える飯を食ひ

前者はまづい附け方で、愚の愚なる駄句、後者はたくみな附け方で、
妙の妙なる名句。かうした句こそ獨立して、りつばな生命を持つ
古川柳の侮どれないのは、時々、こんなのが出て来るからだ。「こわ
いことかな〜」の前句

たわことを笑ひ出すのは他人なり

引越した晩からお七やけになり

御子息の卑怯てまへで傷をつけ

大釜の前へ親子を引いて来る

「たわ言は皮肉な哀愁の句、いろ／＼犯した罪が身を責めて、變な、怪しいことを云ふ、他人は笑ふ、骨肉は泣く、附け方としては最も巧みなものだらう。次は吉良左兵衛佐、八百屋お七、石川五右衛門、「あんなまりなこと／＼」の前句

珍膳に毎日向ふたいこもち
半分は嫁への義理で座敷牢

「はつきりとする／＼」の前句

一二尺吹きなびかせる寒の紅

「珍膳」半分はソレだけの句、「一二尺」は氣持よくハッキリとした句、一句立て、藝術的川柳になる。其他

「とくなものなり／＼」の前句

出來合は右の手で彫る甚五郎

「口惜しいこと／＼」の前句

にはとりは腹のかはりに襟を立て

などは下手な理窟で、詩とは云へない方だが、同じ「口惜しいこと／＼」の前句でも

ごせの髪またゝきをして探つて見

などはよろしい句で、内容もある。「やはらかなこと／＼」の前句で

氣ちがひになつたで嫁の理がきこえ

も佳句だ。こんなのは理窟が理窟にきこえない。「はづかしいこと／＼」で

鼻筋の背筋に通るひきがへる

は、駄洒落とはちがつて諧謔を極めて居る。「けがれこそすれ／＼」の前句で

理窟が理窟にきこえない

唐犬の耳のやうなるかきつばた

は、泥水の中で杜若をきることをにははせたものか、こんな附け方もある、唐犬の耳は、珍だといふので當時は受けたものだらう。
『うつしこそすれ〜』で

親分は地口のやうな辭世をし

臨終の枕のそばで、それをき、取つて書き寫してゐるといふ、滑稽にして哀愁あるもの。先づ附け句の例はこれくらゐで、更に話しを進めなければならぬ。

第六章 萬句合の年度別

古川柳を口にする者、『誹風柳樽』を知らないものは先づ無い、が、其親本であるところの萬句合を知らないものは多い。よし知つて居る者も、これを読んだものは少ない。私は前二章に於て、寶曆、明和の萬句合を一ト通り御目につけて、説明もした、附け方について云つた、乍併、あゝした風に書いて行つては、何萬頁を費やしても足りない、そこで曾て私の機關雜誌『川柳人』が、まだ『大正川柳』と云つた頃に、『古川柳研究の寶庫』と題し、寶曆、明和の萬句合の中から、私が共鳴した川柳を拔萃してのせたことがある

それを基礎にして、一句立と成し、年度別にしてこれを紹介しようと思ふ。但し後章に説く誹風柳樽は、多くこの萬句合せから出たものだから、成る可く重複の句を避けることにして、先づ寶曆十二年、即ち前に引いた十三年の前句附の刊行された前一年の十四回開卷から始める。

掛り人銅壺の蓋で手をあぶり
口留めをしてほころびを縫つてやり
帯しめた海士は巖を這つて下り
水鏡足を洗ふがいとま乞ひ
相應に頬のふくれる小山伏
鬼の面かぶつて下で顔しかめ

など、今日の新興川柳家に扱かはしても、にわかになにに没にしない句だ。

「掛り人」は滑稽なる悲哀。「口留め」は小さな戀愛苦、裸になれば千尋の海の底へはいる海士が、帯しめてきものを着れば、わづかの「巖を匍つて下り」るは深刻な穿ちだ。「足を洗へば濁りくてもうく」
「水鏡」も出来ぬ水、「いとま乞ひは技巧の妙、「小山伏」のやさしきふくれ、「鬼の面」の神秘ならぬ神秘、面白い。

簾入りの雨はぬすみに遭ふ心
土用干質屋の前の物凄さ
筍を二度動かして見たばかり
廻廊で小鯛の潑ねる巖島
軒の蚊の次第に下がる忍び駒
鹽引は鱧になるがいとま乞
追羽子も男がつくと紛失し

いづれも俳句ばたけのもので、しかも當時の俳句とは、はるかにかけ離れたもの、「筈を二度動かす」は所謂哲學的の句とも見られる、「廻廊の小鯛」はまことにスツキリしたもの、私どもが新興川柳を唱道して、古川柳の精髓をより良く活かさう、といふのは、直ちに斯ういふ古川柳へ狙ひをつけて居るのだ、「簾入の雨」を盗みに遭ふ心」と喝破したのは昔の人とは思はれない。「軒の蚊」が爪弾の音で「次第に下る」は沈魚落鴈と云つたやうなところを、市井的生活に云つたものだらう。

大黒もころもくらゐは縫いならひ
さまぐな紙を綴ち足す旅日記
瓦師は知つたふりする都鳥
女房が留守で附木をつかひ過ぎ

料理人尖つた箸で物を食ひ
仲人が屏風を出ると鶏が鳴き
といふ寫實吟もあるが、

怖わさうに眼の本復は空を見る
賣つた日を命日よりも淋しがり
に至つては、百尺竿頭に一步を進めて居る。よく非藝術だと云はたがれる詠史川柳にも

大名にさても其後短慮無し
三保谷は歸ると鈍にして貫ひ
江戸者をだまして腕をとり返し
英雄を論じた後が酸いおくび

など面白いのがある。「大名」は忠臣蔵、「三保谷」は景情との鍛引、渡

邊綱は三田だから「江戸者は氣拔だ、江戸子はだまされやすい。」

「英雄を論じ」は、曹操、玄德、青梅酒を煮て「酸イおくびが出る。」

退治してから足弱の連れが増え

は、芝居がゝり。

胸高にめかけの兄御二本さし

は、妹のおかげの俄武士。

猿田彦 避けずに通る牛の糞

は、向フ處前無し、氣宇内を呑むの慨がある。

寶曆十三年、前々章に掲げた萬句合の發行された年だ。

公卿悪は衣冠正しく下卑を云ひ

小夜千鳥扇の的を射たあたり

品格のある句だが、内容は貧しい。

寶曆十三年
の萬句合

關取はあぐらをかくに手間がとれ

夜着を着て朝飯を食ふ角力とり

關とりの捺す板行に人だから

力士の句に見られるのが揃つて居る、但し名句では無い。

長局役者の 辭世泣いて讀み

色男洗濯水もちつと浴び

「長局」は御殿女中の芝居好き、俳優びいき、「色男」の相手は飯焚お鍋、
こんなのが多いので、川柳はこんなものばかりと誤解されるやう
になつた。

法螺貝ののどがつまるともう仕舞ひ

乳もらひはあつちの兒をば重たがり

は、たいぶ味が深うなつて居る。

還俗のちくりくるとつまんで見
は僧を詠んだ句で、古川柳中の白眉だ。

天人は横つ倒しに遊んで居
など、力の入った句で。

惚れられた日は一生のいい天気

は、古川柳何十萬首の中、屈指の傑作に數へてよからう。こんな句ばかりが川柳だつたら、私ども新興川柳など騒がなくても、どうにりつばな藝術品になつて居たのだ。由來、川柳作家に眞劍が乏しいので、實の持ち腐れをしたものだ。

明和元年の
萬句合

いよ／＼明和元年の萬句合の一斑を御目にかける。全盛期中の全盛なるものは、どういふ風に進んで行つたか、前章にもそれは紹介したが、或は萬句合の體裁や、附け句の例を主としたので、これ

から紹介する一句立て、即ち獨立の句として見たのとはちがふ。

やはく／＼と引つ立て、聞く葡萄の値ね

まんまるに嫁菜の残る犬の糞

ざんざぶり芋莖畑の面白さ

草市にうろたえて鳴くきりく／＼す

といふ俳句畑の自然から人事に食ひ込んで、我等の川柳は發達の途に上つた。

素見物螢追ひく／＼歸りけり

狐釣り尾花に襟をこそぐられ

萩垣の是より左めかけ道

素見物秋の末よりぶらつかす

右々と麥から顔を出して云ひ

御所柿へ枚をふくんで夜討をし
猫のめし入れそへてやる花盛り
釣れぬ日は蟹を追つ駈け追ん廻し
草刈の子への土産はきりくす

たゞ自然を主観で取扱かふ俳人者流(當時の)の態度に満足せず、遊廓の散歩者(素見物)果樹竊盜(柿盗人)などを配合して、人事を客観で取扱かふことになり、終には全く自然を離れて人間を主題する、雜俳的連句の延長として、前句附として空前(江戸時代では絶後)の我川柳が完成(江戸時代だけで見て)されたのである。

許嫁世間で智慧をつけてやり
雪隠をもどればもとの物忘れ
逢ふた日を覚えて居るが女の氣

早合點隣へ行つて馬鹿な顔
きれぶみにせめて使の胸づくし
小侍馬に乗つたが下りられず
心ではあいつをなアと見たばかり
孫の守^{まも}追ひつかれぬを自慢にし
ちよつくと姑を誘ふ嫁の母
おふくろにねつから知れぬ話をし
寝てゐては口の内にて弾いて居る
女房に献すと亭主にきいて飲み
雪隠で餘義無く乳母は返事をし
女房は何ぞの時を待つて居る
門徒宗あまへるやうに經をよみ

だんくくに平ツたくなる枕引
歌の會眠ると笏でちよつと突き
ふんどしがきらひな男碁がつよし
嫁の氣は言ひ値に買つてやりたがり
愛想に茶屋の女房は一ト幕見
湯泥棒二領かさねて小早く着
猿引は失せた一分に頬を押し
下駄置いて一人づゝ行く墓参り

人事の自然をうたつた、今日で私共がいふスケツチ川柳、寫生川柳、寫實川柳にもなか／＼隅に置けないのがある。否今日の所謂守舊川柳家輩では、逆も齒の立たないやうなのがある。況してや不朽の句として見る可き

にはとりは朝まつりごと怠たらす
眞ン中を横柄に行く土左衛門
犬の腕のけてつくばふ草履とり
西海で簪拾ふ沙干狩
掃く先きをやう／＼に立つ物思ひ
病人に西日がさして佛めき
土民とは公家悪のいふことばなり
かんざしも逆手に持てば恐ろしい

明和川柳の
壇場

に至つては、まことに明和川柳の壇場である。みだりに後人の追隨をゆるさない。私どもが新川柳の興隆に、この古川柳の領分以外に新版圖を開きたいと思ふのは、かうした理由があるからだ。

明和二年の萬句合、後に説明する誹風柳樽の初篇が發行された

年の前句附を一睥する。

叱られて嫁は土藏へ泣きに行き

下女がふみ飯の足らぬを重もに書き

と云ふやうな平凡なものも無論多いが、また奇想天外より來ると云つたやうなものもある。

小兒醫者虎の脈など取つて見せ

但しこの虎は張りぬきの虎。

檢校の供は侮どる頬かむり

主人が見えないと思つて。

しうとめのあとへ四五はいうめて入り

あの姑婆馬鹿に熱湯好きで、始末にいかない。

眉間疵平癒すると首が落ち

忠臣藏の師直たる吉良上野介の數奇な運命、この外詠史には

二日酔頼朝ほどな重みがし

といふ變なのがある。大あたまを利かせたので、奇拔は奇拔だが、あまり感心の出来る奇拔では無い。乍併

ワキの僧舞ふ内質にとられて居

鳩の糞ついた御經を借りて讀み

兩眼が二度につぶれて藝が無し

などはたしかに面白い。兩眼が一度につぶれたのならば、琴三味線按摩針、何かの修行でもするところだに、先づ片眼になり、それから目くらになつたでは……穿つといふ言葉よりは、もすこし深刻な人生の見かたである。

筆で髪搔きく催促る日なし貸

冷えますするなぞと火鉢で洗ふやう
猿田彦飲む間に御用かぶつて見
冗談は毛虫をはさむ花の山
繩すだれ兩手に持つて話をし
かな棒で人の躪ツマづく石を堀り
雨やどり押すなくと路次に立ち
まないたの上へつがせる料理人
の寫生川柳寫實川柳から

屋形船山の這ひ出る如くなり
へつついの角へ肥とり火をもらひ
御書院へ四五足廻す雪の朝
手習子蜂の如くに路次から出

姑はたばこをかたくついでのみ
虫賣は啞を一匹負けてやり
飲まぬやつ時々笑ふばかりなり
舟宿をのぞいて通るうろ覚え
の印象川柳と云つたやうなもの

世の中は牛の御前のあたりまで
姑は嫁の時分の意趣返し
死水を嫁は怖々しぼりこみ
遺言へ口の添へたき後の母
槍持を始めて連れてふりかへり
ふところへ乳母は手足をたくしこみ
肥とりの手で釵を洗つて來

墓 参り 嫁 は 筈 ぬ す ん で 來
男 達 一 寸 ひ け ば 負 け に な り

の抒情川柳と云つたやうなものに至るまでを、つらく見に行く
と、これまで第三者から川柳と云へば、是々と輕侮の眼で見られて
居たことの、つまり眞の川柳を世にあまねく流布しなかつた川柳
人の罪だと自責されるのである。

明和三年に至つて、いよいよ全盛期の爛熟がはじまつて。

振袖の顔をつゝむとしめたもの
煤とりの顔を男にかくしけり
あの人の口につき丸裸
盃で鹽梅をすする小鍋立
結び立てのあたままで質を置きに來る

猿轡女房の方をじろく見
間男に一言も無い世話になり
寝た顔を惜しさうに見る朝歸り
大それたはなし女衞と女衞がし
素人になつて昔の恐ろしさ
蓮池を見る御物見へ受け出され
引き窓へ或夜まをとこぶらさがり

この頃、もつとも遊里吟の猖獗を極むるを見(後章に詳説する)更
に一步を進めて性の句、さかんに詠み出され、終には『末摘花』、『柳
の露』などいふ風俗懷亂の句集をつくる可き材料をも、當時の萬
句合は提供した。長所は短所、一利は一害、終に川柳をして其方面
を題にして詠むものかの如くに思はせるに至つた(故饗庭篁村翁

の如き、その見を有して居た。また明和川柳に於て、もつとも特長の有つたのは、江戸氣分をうたふことでも、もとより江戸に長じ、江戸の町人に愛撫されたのだから、さうなるはその筈で、決してこれを否認はしないが、だからと云つて、今日我等によりて時代の詩、人間の詩としようとする新興川柳へまで、江戸を強ゐられるのはたまらない。その江戸氣分の句といふは、どんなのかと問はれるなら、私はこの明和三年の萬句合の中からは、左の句の如きものだと思へるに躊躇しない。(萬句合から選び出して誹風柳樽と爲つたものは、更に後章に其問題について語る時に譲る)

江戸氣分の
川柳

今以て御健勝なは姑なり
世の中に嫁ほどにくいものは無し
通り者蚊帳をまくつて鯉を見

銀烟管持つと滅多に洒落を云ひ
これ隠居などと云はれるかゝり人
板の間へさかなをあげるにぎやかさ
一日は女房の留守も面白い
鯉までも紫になる江戸の水
勝角力薄着の人へ禮を云ひ
女房が留守で錢箱たゞきあけ
女房はあてすつぼうに不人相
今度こそごねると里で嬉れしがり
さあ腮をつけうと左官鏝を拭き
大薩摩喧嘩に節をつけたやう
今以て御健勝の皮肉、「嫁ほどにくい」の痛罵、「蚊帳」から「鯉」、「銀烟

管の「洒落」、「かゝり人」を「隠居」、「たゞきあける」錢箱、「ごねる」は死ぬること、「腮をつける」は食ふこと、「板の間の」さかな、「鯉」の「紫」、いづれとして江戸の所謂生粹通洒落、輕快の妙を發揮して居ないものは無い。なほこの明和三年の萬句合から、私の手帖にのこつて不朽の句は、

聞はれは内の揉めるを遠く聞き
吹き消せば我身に戻る影法師
花の山はるか麓に潮來節
逃げもせぬものを周章て菌狩
切つた指受け取る時は動くやう
心中は朝飯前の人だから

明和五六年
の萬句合

明和五年、六年は、すでに全盛期の爛熟より頽廢に移る出口、入口で

ある。其時代の川柳は、張り切つて鑑賞することが出来る。委しくは誹風柳樽の七、八篇ごろの説明の時に譲るが、行掛り萬句合から數句を拾ふ。(明和四年の萬句合は、私はまだ讀まない)

縁遠い娘からだにつくり飽き
晝までの勝負と歩るく初松魚
書置の初手へ不幸のわびを書き
御つゞきがあるかと聞いて悪るくいひ
蚊帳つるを見いゝひどい雨やどり
どこからか人の出て来る大伽藍
づぶ濡れになつて兄弟わたり合ひ
下手將棊袖をひかれて睨め廻し
座頭よくわるい女に惚れぬなり

遊ぶ氣をやめると下がる男ぶり
追々に来るぞと上がる大一座
新世帯夜具に屏風を立て廻し
脈を見る醫者焦げる程手をあぶり
捨てる兒に道々乳を強ひて行き
侮どつて婆アに負ける宗旨論
座頭の坊いびきばかりで寝たが知れ
水賣の砂糖何だか知れぬなり
座敷牢どつち附かすの後家が出来
本を手に持ったばかりで高躰
姑婆 八十七で不慮の事
聲色で我を叱つてさとで泣き

ひとしきり四十五人で悪るくいひ
奉行 職 二枚一枚御聽分け
三井から比翼の鳥の巢を運ぶ
舟と陸わねても末に衣紋阪
大海の中に育だつた蜆貝

川柳點の萬句合の紹介は、この邊でうち切とする。因に合印の
天満宮云々は、川柳點だけのので、他の點者のは、それと違つて居た
やうだ。なほこの萬句合を一名曆摺とも云つた、伊勢曆の體裁
に似て居たからだ。嬉遊笑覽に

前句附判者多き中に、寶曆の末、明和の初頃、机鳥、露丸、川柳等大
に行はれ、月次萬句合として集まる句數一萬六七千、勝句四百
四五十、半紙五六枚に、曆の如く細字に印刻して摺る云々

とあるのがそれだ。而して、其萬句合の尾に添へた、催主の附言を見るに、寶曆十一年十二月末の口上

追て申上候、當年も御定連様方、御憐愍を以て、相應繁昌仕、忝仕合奉存候、最早月つばく仕候に付、目出度休み、又々來午年中秋五日初會と仕、致興行候間、其節相變らず御最負奉願上候以上即ち寶曆十一年十二月十五日を以て、最終の開卷をなし、それから休み、寶曆十二年(壬午)八月五日より開卷する、といふ豫告だ。『御憐愍を以て』と云ひ、『御最負』と云ふ。當時の前句附世話人の没面目の體度、見るべきでは無いか、當時の爲政者から賭博類似の興行と認められ、一般社會から輕侮の眼で見られて居たことは、隨つてその本體の作句にも、高尚な藝術的なのは敬遠され、野鄙な遊戯的なのが歓迎されたのだらう。安永四年の萬句合の開會の辭

と、閉會の辭とを併せ掲げて見やう。

口 演

各々様御厚情を以、年々前句繁昌仕、恭仕合奉存候、又々當年も興行仕候、先達而、神に誓ひ申上候通り、諸事偽がましき儀、一切不仕、正道を專一と仕候、尤も景物等も隨分入念差出候間、ひとへに御憐愍御最負を以、御出情奉願候。

萬句合 料十六穴

川 柳 評

追而申上候、題の儀はその當日々々を相用、一切おくりには不仕候。

十六穴とあるのは十六文のことで、入花料である。其閉會の辭

は、

追而申上候、各々様方御出情を以て、當年殊外繁昌仕、忝仕合奉

前句附興行者の乞食體

存候、もはや月つぱく仕候に付、當年は當會切りにて目出度相
休み、又々來申年中秋五日より興行仕候、其節は相かわらず御
出情奉願上候
以 上

開會辭に「御憐愍」があるから、閉會辭には無いが、其他に大概
それがある。「御れんみん」としたのもある。「御出情[△]」は御出精
の誤だらう、題とあるのは、「引ぱりにけり〜」の類で、それは一回
限りで、次の開卷に送らないことわつたのだ。尙ほ之について
の考證はいろ〜あるが、なるべく技葉を避けて先途を急ぐ。

第七章 露丸點の萬句合

前句附がいつしか川柳といふ名になつたのは、前にも記したや
ちに、多くの前句附撰者の中で、柄井川柳の點をした者が、最も人氣
に投じたので、當時の社會(明和、安永頃)は、この前句附萬句合に載つ
た句を川柳評或は川柳點と呼びならはした。川柳點々々々、それ
がやがて點を略し、單に川柳と呼ぶることになつたのは、却つて
狂句隆盛の寛政以後だと云ふこともすでに云つた。川柳の評點
しない、他の評點までも川柳點と呼んだのである。また實際さう
呼んで可い性質の物で有つたのだ。そこで、柄井川柳以外の評點

にかゝる前句附を三四紹介するのは無用の事では無からうと思ふ。

柄井川柳以外有名の選者の中で、雲鼓、收月は享保の末に活動して居た様だから柄井川柳の活動より、だいぶ前の人である。非常な澤山の題で、ひとり前句ばかりで無く、冠(上五字)は勿論、沓(下五字)帶(中七字)折句などごたくして居るから、題は略し、獨立句として御目にかける。雲鼓點に

雲鼓點の驚異

神國の旭を拜む毛唐人
入相に浮世をたゝむ花の幕
ぬすびとをそつと縛ばつて火打箱
われが身を盜すんで遊ぶ若盛り
伽羅の香に泪の落ちるかぶと首

長崎へ卯月の頃に年始狀
大名に腹を貸したで玉の輿
はじめての京に目を病む若旦那
關とりに勝つて五色の雨がふり
指一本足らぬ女房を大事がり
勘當の夢は廓をかけ歩るき
いつ見てもそろばんの無いだいどころ

寶曆以前にすでに斯うした句を作る者が有つたといふことは或意味に於ての驚異である。江戸の年始狀が長崎へ四月(卯月)頃に行くとか、毛唐人が日本の旭日を拜むとか、また伽羅の香の首に泪を落すとか、だいどころに算盤の無い豪奢ぶりを詠んであつたりするところに、當時の江戸の風俗、思想等を概見することも出来

る。收月點には

見おぼえた星に足元留守になり
芭蕉葉は尺とり虫もとまりがけ
辨慶は力の強いわけがあり
不機嫌な丸寝の裾へかける夜着
飛ぶ鳥が落ちて進物臺にのり
但しまた鎌倉へでもござるのか
もう一度異見きく身に戻りたい
をれ一人袴を着ても行かれまい
朝歸り心はこゝにあらざれば
何事も梅の花とは思へども
肉屏の中に四十の奥家老

伯夷を盗跖

ぬすびとのとなりに干たる君子あり
簞入が親の異見をちいさがり

などの句がある。なか／＼隅に置けないやうな佳句も見える
が、これは私が讀んだゞけの數冊の收月點から抜いたもので、しか
も收月の號は初代から三代目まで有つたと聞いてゐるから、その年
度がいつ頃だつたかを明かにすることが出来ない、机鳥點がほ
しいと思つたが、この稿を起すまでに、とう／＼得ることが出来な
かつた。露丸點は、ヤハリ寶曆十三年の分を得たから、これをのせ
る。川柳の萬句合に對照して讀んでいたゞきたい。

未九月二十五日開キ

萬句合 惣連四千五十一員 三まひ板行

露 九 評

收月の號は
一人で無い

合印

大

×まさかないもの
 ○のぞきこそすれ
 ▲むりな事かな
 ■黒い事かな
 わたしこそすれ

追
 折アメ

▲もみくちやな手は堪忍の道具也

本所松坂町 美都里

平家には三千兩の穴が明き

市谷町 初瀬

×清水へ地ひゞきがして聲に成り

芝金杉 青柳

○九太夫はかへすゝに目をこすり

糺町三丁目 龍田

×牛若の太刀は尻尾の取廻し

音羽町 難波

▲かゝり人隣へ腹を立てに行き

神田御臺所町 八ッ橋

△七足の詩にて兄きも舌を出し

牛込高田 明石

金札を三天王は萬度にし

神田四軒町 萬年

○鼻紙でおこす火燧はじれつたい

麻布四千堂 松がへ

○おさらばを窓から一ッほうり出し

牛込通寺町 尾花

○椎シの木の影へまち駒はつて置き

市谷 はつせ

藏前へ大職冠から使者が立ち

同 同

笛吹は二日日本の氣をはなれ

本所 みどり

▲くどかれて火鉢の灰の美しくさ

同 同

錠口へ半造作な顔を出し

金杉 あをやき

×西行はあはれな所でかすにいり

同 同

○先達のうてに命をあつけて見

牛込水道町 江戸川

×手長島平伏の時きりくす

木挽町五丁目 若松

- × 六原に三人揃ふ女の氣 番町 末 廣
- 錠口へふさはぬ顔はほろにがし 四谷傳馬町 明ぼの
- 敵からも使者は女で面白し 麴町 たつ田
- 神代にもだます工面は酒が入り 同 同
- ▲ かけ乞が來れば和讃を長く引き 神田 やつはし
- 梅の花一輪咲てかぶになり 芝二本榎 水 仙
- ▲ 浦島は仕舞仕事にほうり出し 牛込辨天 しのゝめ
- × 金持を黽て通る逆サきり 赤阪定口屋敷 梅がへ
- ▲ ねづの客理も非も分ぬいざを言イ 二ばん町 藤 戸
- × 仲人はたとへる顔をねめ廻し 深川仙臺河岸 神 音
- 梅幸に似て部屋くが總に立ち 本郷四丁目 井 筒
- ▲ 雪かきを叱りながらもふところ手 飯山町 柴の戸

- ▲ 三甫右衛門一段高く愚痴を云ひ 麻布龍土 龍 水
- 居合拔こじりで壁をつき破り 新大阪町 若 浦
- ▲ 釣竿で波をしたゝかひつぱたき 市ヶ谷 はつせ
- 飛鳥川平目の住に相應し 芝 あをやき
- × 仲人にくさめをさせぬ嫁をとり 同 同
- 口上の尻はのれんの外へ置き 糺町 たつ田
- (折) あたゝかな日に目立つ重ネ着 牛込 あかし
- 色娘まるらせそろによりかゝり 麻布 松がへ
- 仲人になぎりこぶしの障子越 牛込 おはな
- ▲ 和藤内半造作のともをつれ 牛込 江戸川
- 九目の中へ一目生きて見え 原町 千とせ
- (折) あさなくに目を洗ふ花 四谷 あけぼの

- 透間から箔屋は細く物を言ひ 新堀 わかまつ
- ▲甚五郎酒盛の場で左りの手 芝 すいせん
- 辨慶はあんまり譽めぬ虎の巻 箱崎 金ひら
- 献立もこゝらで聳のねる時分 二番町 藤戸
- 二階にも大きな牛が晝寝して 深川 はつね
- 立聞は團扇を持って蚊にくはれ 本所 みどり
- 盃も御符の時は手がよごれ 同 同
- 川越も佐々木と聞いていやになり 市谷 はつせ
- 頼光をはじめ梢へ小便し 同 同
- ▲なびかねば火燧も寒い道具也 糺町 たつ田
- ▲呬の一段ちがふ箱はしご 音羽町 なには
- ▲若殿のつかふ桂馬は五間とび 同 同

露丸も川柳
ほど盛んに
は無い

- なをくを先へ見て行面白さ 神田 八ッはし
 - ▲小便で無用の札をたれたをし 同 同
 - 湯屋の嫁来た四五日はめづらしい 神田 まんねん
 - ▲仲鷹も蜘蛛には深い恩があり 同 同
 - 軍場へ大工のやうな坊主が出 木挽町 わか松
 - 振袖の元祖へ大蛇のたをうち 番町 すへひろ
 - 陣扇置黒谷の澁團扇 同 同
 - ▲九ツの尾で大國をこねまはし 芝 あをやぎ
- 三枚板行が二枚だけで、あと一枚が不足して居るから、勝句の數は
わからないが、川柳評ほどに盛んにはなかつた一班が知れる。投
吟者も川柳のと大部分は同連中であるが、拔句がよほどちがつて
居る。詠史物を好んで抜いたらしいが、學問は川柳ほどに無かつ

たのではあるまいか。六波羅を「六原」と書き、遣唐使で唐に居た時、蜘蛛が野馬臺詩を教へてよませた吉備眞備の傳説を、安部仲麿へ持つて行つたのを抜いて居る。頼光四天王の一人渡邊綱が、羅生門へ鬼神退治に行つた時の金札を、他の三天王が萬度にしたなどは馬鹿な句だ。「九太夫はかへすく」、「鼻紙でおこす火燧」、「仲人はたとへる顔」、「居合拔」などは前句としても一句立としても面白い。「もみくちやの手はむりな事」の前句だから、所謂七重の膝を八重にといふ程に手をもみくちやにする、といふことだらうが、「手長島」の人間が「平伏する」と「きりくす」に似てゐるといふのを「まさか無い事」へ附けたのは、當時は拍手喝采されたものだらう。「小便で小便無用の札をたれ倒すを無理な事」へ附けたは勇氣勃勃で恐れ入るが、まア川柳はこんなもの、といはれては更に恐れ入らざるを

當時は拍手
喝采の句か

得まい。「若殿のつかふ桂馬」の勇氣は、同じ「無理な事」でも味がある。さて露丸評については、私の手元に五枚ばかり有つたのが、震火災で焼けた。寫シは有る。

辰十月廿七日開キ

萬句合總連千三百十七員 二枚板行

露 丸 評

たゝきこそすれく
○にぎやかな事く
▲しづかなりけりく
×さぐりこそすれく

▲冠を柳の撫でるうらゝかさ 牛込白銀町翁
○色直し雪をふるつた花のやう 關口水道町東

- 萬歳はつい來るやうないとま乞 飯田町九段阪 千鳥
- 天かれをゆるさぬ筈と師匠云ひ 牛込 おきな
- ×銀烟管親仁は夢で二服のみ 飯田町 千鳥
- ▲簾入の高慢琴を借りにやり 四谷杉大門 鳶 凧
- ▲散りてからそして氣のつく柿の花 松島町 常盤
- 二三枚着物出させるいゝきもの 關口 あづま
- 渡守どこかで返事ばかりする 牛込 おきな
- ▲奥様の鯛は二夕箸穴があき 麴町十丁目 武藏
- 月はよし氣はもめるしと女房寢す 牛込 おきな
- ▲くまどりのやうに晝寢の側を掃き 四谷 鳶 凧
- ▲庵の戸へたづねましたと書いてあり 同
- ▲御不縁のもととは御ぐしのちぢれなり 關口 あづま

- ×勘當をゆるす方からふるへ聲 關口 あづま
 - ×計略のたねがつきたとむす子云ひ 同 同
 - ▲いつ頃の質でござると指をなめ 同 同
 - ▲内談の火鉢二人でいちり消し 同 同
 - ▲茶畑に嘶いてゐる放れ馬 牛込 おきな
 - 泣くことは無いと四ツ手へ烟草盆 同 同
 - ほめられる聲が不孝の一つなり 新橋山下町 筑波
 - 墨をする手代總身を動かせる 牛込原町 千鳥
 - ▲吸ひつけて出せば夜着から口を出し 四谷 とびだこ
- 以下略する。この萬句合は辰とばかりあつて、それが寶曆十年の庚辰やら安永元年の壬辰やらがハッキリしない。が、前の寶曆十三年に投吟してゐる各町の連中と、後のこの萬句合との連中と、す

萬句合の取
次と會林

つかりちがつてゐる、而して寶曆十三年の投吟家は、大かたは川柳評の萬句合へ出した人と同じである。寶曆十年と十三年との間、僅々三年の隔りに、さう連中の顔が變らう筈が無いといふのが安永説で、一方寶曆説は、たとへ三ヶ年の隔りはおろか、たとへ同年たりとも、全然ちがつた團體から各自に出して居ることもある、句の間屋、即ち取次や、句の纏め場所、即ち會林と稱する者がちがつて居ることもある、且つ句風にどうも寶曆らしいところがある、と云ふ。安永説は更に之を駁して、明和六年頃の句風は、川柳評の萬句合や誹風柳多留に照見しても、こんな調子は見える、況してや柄井川柳と露丸との選眼は同じで無いに於てをやであるといふ。其處で、しばらく右露丸評は安永元年の萬句合として置く、因にその頃の川柳團體、即ち前句附の連中名を知る材料として、誹風柳多留第十

二篇の卷首に記したものを擧げると、

市谷田町	初瀬	麻布永坂	柳水	小石川白山	鶴龜
上野山下	櫻木	牛込	深雪	新堀	若菜
神田	杜若	四谷	清瀧	青山	眞砂
櫻田	高根	麴町	初音	大傳馬	諫鼓
千住	登	下谷	いろは	今戸	居ます
小日向	養老	八丁堀	兜	小石川	舞鶴
二本榎	水仙	丸山	風雪	神田	羽衣
橋町	橘	藥研堀	朝日	柳原	大津繪
三田	玉川				

明和安永の
川柳團體

の二十五團體である。また古川柳の作者は知れないといふことになつて居る。誹風柳多留には無論それが無く、母體であるところ

ろの萬句合にも、團體名を記して作家の名は知れないが、柳多留八篇を見ると、其序文の中に

(上略)其序に組々を補助の手とりの好士がた俳名聞つたへを記す(下略)

として左の雅號が擧げてある。

吐旭	紫夕	都柳	在豆	襄考	百衛	龜峯	風也	春朝
千歌	文峨	五鳥	和竹	五樂	萬岫	染水	寄生	花鳥
蘭水	葉十	青江	門柳	祇風	茂川	榊水	村竹	紅梅
川翟	竹賀	千雀	粟德	蘆舟	嵐巴	歌遊	狐笠	五秀
龜甲	未學	名木	井陵	似竹	秋懂	鐵炮	玉枝	三伯
巴連	牛町	綠枝						

いづれも俳人の雅號とちがつたことは無いやうだが、未學、牛町、鐵

當時の川柳家の雅號

炮などちよつと奇抜なものもあるにはある。ヤハリ川柳式とでも云ふのか。斯人達の作句もいくらかは知ることの出来る材料はある。後章柳樽叙述の條に譲る。

要するに、露丸點には、いろ／＼の缺點もあるが、ヤハリ川柳を除いては、彼だと云ふことが當時一般の月旦だつたらしい、それは後章の古今前句集の條で證せられる、こゝに特に彼が爲めに章を立てた所以である。

第八章 川柳で無い川柳

川柳露丸についで、見る可きは白龜の萬句合である。

未十月十一日

萬句合惣連七千八百八唸 白龜 櫻行出四枚

めつらしい事く

合符

鳥

● わたりこそすれく

▲ あがりこそすれく

□ じやまに成りけりく

いくつでも

左 □やはらかな舌が劍の名をとりて千四百八十一唸集尾張町一丁目 玉松堂若緑

中 あんなのは見ぬと女のいふ女神田紺屋町三丁目代地名月

右 河豚といふ物にありつく歌枕麻布一本松二葉

新田の神は人より後に出来本郷四丁目横町紅梅

みいらとりみいらを取りて歸りけり芝神明前寸平

大判は懷中に居る金で無し湯島切通玉井

□ 仕付芋は急に着る時縁が切れ一本松二葉

□ 無理にとく帯ほど長い物は無し日本橋新すきや町緑

▲ 芝海老は心の外をまけてやり牛込水道町江戸川

外科へ行く鼎は道のはんじ物麻布飯倉松枝

餘は略することにするが、●の「わたりこそすれく」には勝句が非常に少ない。僅かに、

金銀があるとかくすに將碁では

白龜の萬句合

といふのと外數句だけだか、□の「じやまになりけり〜」は、最も多く抜かれて居る。

こそぐつて早く受けとる遠眼鏡

ふろしきも今は何をか包むべき

あと足を團扇につかふ夏の馬

龍宮は蠅を追ふのにかゝつて居

ことふれの鼻かむ袖に鈴の音

などといふのがある。▲の「あがりこそすれ〜」には

首尾のよい葛籠しめるに足が入り

蝶々の近づきで無い袖も無し

「首尾のよい」重い葛籠だからだらう。「蝶々」は古今の名句。「鳥」といふのは合印で、合符とある。別に「花」といふのもあるから、多分川

合印に花鳥
風月

柳評の天満宮仁義とあるところが、花鳥風月云々で表はされたのだらう、今一ツ白龜の萬句合がある。開卷の年月がかすれてわからない。

萬句合惣高六千三百二唸 白龜 板行出三枚

合符

● あたりこそすれ〜

● きつい事かな〜

▲ いつもかはらぬ〜

× ちがひない事〜

よく見れば

花

挽茶にも鼻息といふ青あらし 千三百五十一唸集 尾張町一丁目 玉松堂若緑

月花に着古して後みの色紙 千百十五唸 神田紺屋町三丁目 代地名月

▲ 桃の日の奥はこまかな流しもと 麻布一本松 二 葉

- ▲ 不忍の蓋は釜よりはやく明き 湯島切通 玉 井
- さいかちの實もさやあてはやかましい 本郷四丁目横町 紅 梅
- 髪ゆひの出来た相圖は肩へしれ 芝神明前 寸 平
- ▲ 武士はみやげ買ふとき時をき 尾張町 若みどり
- 縋子肩ぎぬも紋がある 同 同
- はら立て出る傘はひらき過ぎ 神田 名 月
- 瘡守は團子で壁をぬり廻し 木挽町五丁目 若 松
- × 黒木うり江戸なら金で買てやる 牛込赤城下 玉 川
- × 花咲てかけとりに行く植木賣 牛込水道町 江戸 川
- 白壁の虻は牡丹の物ぐるひ 日本橋新すきや町 錦
- 人聲にすいゝ動く枕蚊や 芝金杉 青 柳
- 枝豆でこちら向かせるはかりこと 淺草田原町 唐 崎

- ▲ 眞實にはでな言葉は更になし 櫻田新橋 八重垣
- 祭禮のだしは見付て跡へ時宜 北八丁堀幸町 兜
- 棒ぬくと羽はたきをする挾箱 神田 名 月
- ▲ 白紙はへつらひの無い神酒の口 同 同
- ▲ 水呑はあかねの裏が骨ツ切り 同 同
- 印籠にせめて一色持たまへ 麻布飯倉 松 枝
- × 石切の覺た歌はみな辭世 一本松 二 葉
- ▲ 行燈の闇は晝間のをき所 同 同
- 疊屋や手の舞足の踏どころ 同 同
- × 餅の火がこたつへ來ると夜が明る ゆしま 玉 井
- ▲ 火吹竹ふいご祭にはらを立 神明前 寸 平
- × 竹馬も耳にいたゞく八幡黒 同 同

×化粧坂草摺きれた質をとり 木ひき町 わか松

●ぬすまれた顔へ漸く日が當り 赤城下玉 川

芋の葉の露したませる土龍 牛込 江戸川

×さぼてんへ直ぐに代付書て置 尾張町 若みどり

つむじ風中に刃物を持って居て 同 同

●長刀の弟子の見て居る水車 本郷 紅梅

白酒をきれいに呑だ鼻の先 ゆしま 玉井

●おさな子のころんで泣かぬほめ詞 柳原新し橋河岸 二月

「挽茶」に「鼻息で青嵐」があたりこそすれに附かず離れずの附き方だと見たのかも知れないが、これを巻頭に置いたり、「月花」の色紙もツギに「あたる」といふ意味で高點に推したりすることは、當時の前句附選者の傾向を見ることが出来る。その中でひとり柄井川柳

俳句には見えない特色

の特にすぐれた撰者ぶりを見せたのが彼の名を成した所以だらう。「桃の日」の雛祭の句はやさしい上品な句で、「不忍の蓋」は當時の年中行事を調べたらわかららう。「さいかち」の句も挽茶の鼻息同様に、後世の川柳が墮落して狂句になつた原因を作つた類の一種である。これは後に説明する。「武士」が「時をきく」のは屋敷の門限を氣づかふからで、つまりらぬ句だ。「瘡守」「花咲ても同様」だ。「白壁の虻」はあたりこそすれに附けたのだが、非常に面白い。「牡丹」の物ぐるひは、今日で云へば主觀川柳として推賞しても好い。「いづもかはらぬ」へ附けて「眞實にはでな言葉は更になし」と云つたなど安價な哲學の句とはいひながら、俳句に見えない特色がある。「黒木うり」は例の江戸自慢の江戸兒氣質のあらはれた。其他は「疊屋」が滑稽で、「餅の火」に時代の生活のあらはれを見ることが出来る。

る、「化粧坂」は鎌倉時代の遊里で妓少將の居たところ、其情人にして金の無い曾我五郎が、朝比奈に引きちぎられた鎧を質に置く、といふ洒落、川柳詠史の常套手段である。「ぬすまれた」は有名の句だ。「さぼてん」はその頃流行の盆栽で珍重せられたのか、明和度の句には住々見うける。「おさな子はきつい」とほめるといふので、附句としては成功だらうが、一句立に見ては凡の凡なるものだ。こころは前句附の缺陷である。この外には「あたりこそすれ」へ附いた

ぼんぼりで下見る時は上へあげ 木挽町 若松
 にくい事親類書の時を期し 湯島 玉井
 ふところに随分御氣を付けられい 一本松 二葉
 が目につく。「親類書」の時にかたきをとつてやるといふのも、當時

掬兒を詠んだ川柳

の生活が見えるが、面白いのは「ふところ」の句だ。掬兒の句は川柳にはすくない、掬兒は我國の上古からあつた叛罪で、江戸時代に於て、大に發達した、衝き當つて懷中物を掏る、といふ至つて平凡なところを詠んだのだが、珍らしい見附どころと云ふので、抜かれたのだらう。「きついことかな」に附けたのでは

熱海では算でゆでるひたし物 新橋 八重垣
 冬の不二眞ンから雪と思はれて 尾張町 若緑
 東山どのは蒔繪に名が光り 神田 名月
 さくら炭おこると人をはねつける 南傳馬町 白菊
 早乙女は折々腕で汗をふき 田原町 からす
 上人も太刀の折れたもふり向かず 赤城下 玉川
 桃太郎團子で釣つた供廻り 尾張町 若緑

「熱海の温泉の「寛」でしたし物を煮るとか、東山の「蒔繪」の愛好とか、早乙女が「腕」で汗をふくとか、いづれも江戸時代の上流下層の生活のスケッチ、日蓮の龍の口、桃太郎の團子はくさ草紙の氣分、別の奇もないが、

南蠻といへば療治も恐ろしき 二本松 二葉

飛軍角行のみんな成りこむ一の谷 尾張町 若緑

は二つともきついことの附句であるばかりで無く、一句立の句としても見られる、南蠻は和蘭外科のことだ。「いつもかはらぬ」に

床へ来ていやみに櫛を深くさし 尾張町 若みどり

笠はらひ額で鈴をふりをさめ 同 同

「ちがひないこと」に

あかゑいの針にかはつた恐ろしみ 尾張町 若みどり

居風呂を巫女は熱いといひかねて 尾張町 若みどり

がある。この連中に特に佳句の作家があるのが目につく、作家の名の知れないのを遺憾とする。

桃人評の萬句合が一枚ある。

辰九月七日開二會目

萬句合惣連千百三唸 桃人評

もはや能い頃ロ

●かたまりにけり

▲はねたり

○動かぬものた

しづかなり

かまへて居

■クツつんでおく

●穴嬉しとの言の葉が國津民 牛込神樂坂上 榊

遠くから楽しみにする立チ姿 同 赤城下 玉川

桃人評の萬句合

孕みたるたんざくを産む梅やしき

湯しま切通 玉川

■ 鍬鎌の徳を我家につんで置く

市谷田町 初瀬

シ 札らくに打竹生島

四谷坂町 紫

○ かうなつてからはとしまがこしをすへ

麻布一本松 二葉

▲ 二枚く〜蠣まかり出て申すには

同 新町 なには

● くろむ乳はならの女もさらし得ず

飯倉片町 松か枝

■ 姑のみやけによめ菜つんで置く

四谷忍原 三よし

おやの戀こゝろでばかりこまつて居

十三丁目 濁澤

○ 痛サをばついまんちうでしてやられ

芝金杉三丁目 青柳

折 ゆだんならぬと氣をつける母

本所松阪町 礎

約束は尾上のかねと夕間ぐれ

麴町天神 梅

シ 娘戻つたあし〜の藪

芝一本榎 水仙

垢かりのふ食べつく田おもひ出す

明神下金澤町 明石

○ 折々は尻に敷金浮世じやナア

四谷竹町 八橋

● そこ豆を鹽づけにするいせ参り

淺草新堀 松風

△ 八チ目の徳を見つけて端のいし

新宿中町 奥村

● 鶯の巢に落付し一家中

牛込 柳

■ 屋形船冬はたゝんでつんで置く

赤城下 玉川

● すきくしに引上らるゝやみあがり

市ヶ谷 初瀬

● 一りんの花に小蝶のやうし聲

坂町 むらさき

○ 結納は素一步なから持おもり

新町 なには

▲ 料理人いけすの鯉にしつけられ

四谷 谷みよし

▲ 松前の家根は日よりをうるさがり

一本松 二葉

▲ あつい茶に薄い茶碗をみちんにし

十三丁目 おもだか

- 姉に實が入ればいもとに花が咲き 傳通院前 山の井
 - 古い掛ケ取得ん事は不定なり 四日市 八しま
 - 船頭の句は豊年をつんで置く 鮫かはし 小 櫻
 - 雷に蚊屋のほうばる長つぼね 飯田町中坂 柳
 - (戻り) 寶ものかひてうで見ると直だん 玉 川
 - (諷) 三ッ葛は葵の上のうるしもん はつせ
 - (戻り) 福のかみもりまして来た古イ屋根 むらさき
 - 御夜食をうかりくと食つたばち 日本橋釘店 錦
 - 堀こしの桃人々の目にかゝり 牛 込 柳
 - ▲ 現金にゐんでんきんちやくかんせん縫 湯 島 玉 井
 - ▲ 髪おまや鯛の尾かみに千代の糸 麴町九丁目 初 花
- 後會十三日迄に被遣可被下候

會 林 柳 可

俗臭芬々の
月並俳句

辰は、安永元年壬辰らしいが、柄井川柳が盛んに名句を撰んで人目を聳だてた頃だ。さうして同時の點者にかういふのを撰んで自ら得たりとした選者が居た。千百句の内から四十句足らず抜き出すのに、こんな月並俳句臭の芬々たる者ばかりで、「しづかなり」かまへて居る冠二題、「つんで置く」といふ沓(下五字)が一題、折の字があるのから折句かと思れば、かまへて居る冠付らしい、折といふ字はカ或は構の書損か。「戻り」、「諷」はいろ／＼詮議したが、この文を草するまでにハツキリとしたところは不明である。そはともかくとしてこの一枚の萬句合に一句の佳什無き、蓋し衆望無きが故に好句の集らないのか、市谷の初瀬連、芝の青柳連、芝の水仙連

菊丈の萬句合

なども出題してゐるが好句を投じないのか、好句を抜くの明が無いのか、要するに月並俳諧の傳統に拘々として、川柳點の如き新傾向を異端視して居たのだらう。其類に今一ツ菊丈點がある。文字も他の川柳、露丸、白龜、桃人の萬句合の如く曆摺型の文字で無く、大字で亂雜、たとへば席上筆記の儘を木板にしたものゝやうだ。

未九年十五日

惣連一萬三千百餘句

菊丈

ふらりく〜とく

次第く〜にく

奇麗也

人は禮安扇子にも要あり

二八といへば銀遣ひ

寺作 青梅クミ
武總 耕壽クミ

いさゝらは皆ころぶ氣の懷ろ手 飯田 鶴子クミ

(シ)親の年知れば夜を日に孝厚し 上州 左傳クミ

駕の酔草履で直すほとゝきす 芝車町 湊クミ

繪双六まつ振出しは若旦那 三田一丁目 鳴渡クミ

(シ)九十目の重荷をおろし戻り駕 府中 玉川クミ

羽子板の繪を書て居る身の師走 糺町平河 森クミ

かゝる時歌もよまれず箱根駕 本所 松竹梅クミ

以下略する。(シ)とあるのは「次第く〜にく」の前句だらう。「箱根駕」なら随分無理な熟字のやうだが、當時はさう云つた通語も有つたのか、不明、又別の刷物で

未十月五日 連壹萬三千六百句

初音

さく 丈

さてもうれしやく
若き事かなく
見れば取るものく
十分な事く
たのしめく

長閑也
なつかしや

朝起と取なされたる朝歸り

上州左傳クミ

髪結ふて淋しく見ゆる海士の顔

府中玉川クミ

呼返す聲は以前シの女なり

芝車町湊クミ

(ワ) 葬の華見ず小夜千鳥聞かず

武總耕壽クミ

(タ) 人に賣る身で人を買ふうさばらし

本所松竹梅クミ

(ワ) 折節はまたさみせんの音すなり

稻毛日ノ出クミ

(ミ) 美しき手も惜しげなき土筆

本所松竹梅クミ

遊山旅する身の上も一里塚

姉崎青砥クミ

以下略する。「髪結ふて」の合印は「先ワレ」といふやうな字が有つて意味がわからない、無印のは「さてもうれしやく」に附けたものらしい。「髪結ふて淋しく見ゆる海士の顔」は佳吟だ。又別の刷物で

申九月廿五日

連壹萬三千百余唸

初音

菊丈

奇麗なりけりく
ひらりくくとく
頼のもしいことく
ちらりくくとく
次第く、にく
ほまれなりけりく
みがきこそすれく
いつみても
いつまでも

献立になき風雅あり包み箸

府中玉川クミ

- (シ) 猪牙に二坐頭笈の上の眞桑瓜 武 總 耕壽クミ
- (シ) 雪月花捨てるともなく老のさび 上 總 千里クミ
- (シ) 末迄は書かでありたき小町の繪 芝車町 湊 クミ
- 鶴四五羽動くがごとき金屏風 木更津 黒戸クミ
- 船ばたへ出してゐる手を叱られる 宇田河町 近江クミ
- (ミ) 傘といふ名の附きし女郎買 武 州 鹿子クミ
- (チ) しのゝめに命毛はかり大文字 上野町 加賀見組
- (タ) 見ぬふりを餞別にして來る追手 麴町平河 森 クミ
- (タ) 老の杖老の身は又家の杖 愛宕町 疎 影
- (ヒ) 剃刀にはごの子ほと息をかけ 黒 戸 黒戸クミ
- (ヒ) 何の氣も付かぬ娘の茶の給仕 同 同
- (ホ) 取られても切りたる綱にちがひなし ちさと組

海もなき木曾に波打つ鉦屑

黒戸クミ

ちよつと代つた附け方がしてある。「しのゝめに」の句は、京都如意嶽の「大文字」を詠んだものだらう。「鶴四五羽」の「金屏風」は名句だ。「綺麗なりけり」の附句として生色がある。「剃刀」へ「羽子の子」に吹きかけるほどの息を吹きかけるといふのを「ひらり〜」へ附けたのは附句の上乗だらう。

南華坊評の萬句合の句を紹介する。「これは〜と〜」の題に

替 銚子 大 盃 へ 水 車 武州 立花組

渡し守ふだん浮世を横に見て 房州 猿島組

といふのがある。「渡し守」はあまりに技巧を弄した痕がある。「替銚子」は景氣の好い、朱煌々、金爛々とも云ひたいやうな句だ。「さりなりけり〜」に

山々に咲けば海にもさくら鯛

元鳥越 青柳組

燈籠へ身を捨てに行く夏の虫

妻戀 和歌壽組

と附けたは、前句附としては手際であらうが、これだけではつまらない句だ。ずつと後に出来た句に

下戸が箸とれば嵐のさくら鯛

高燈籠はるかに虫の死にどころ

とある。文藝的價値は別として、この方がズツと面白い。「廣めこそすれ〜」に

椀箱の蓋の無いのに困ります

本郷井筒 三千堂

この時代に、「もう「ます」を其儘に言文一致の詩としたのが有つた。「です」や「ました」は大正、昭和の産物では無い。「ぶらり〜」と〜」に

たもとから浮世をのぞく珠數のふさ

守都宮 芙蓉組

今日の日をだめと思ふてござらぬか

麴町 高砂組

笑はれて梯子を下りる菖蒲ふき

浅草御堂前 武藏野組

と附けた三番目の句は甚だ穩やかで無いが、さりとして風俗を害なふほどの物でも無い。「たび〜の事〜」に

言譯をよう言ひ廻す若旦那

四谷大木戸 松島組

身あがりになんすの前も耻かしい

御藏前 常盤組

と附けた二番目の句は、聊さか微笑ませるものである。

幸々評の萬句合がある。幸々はだいぶ後かれて居るやうに思はれ、萬句合の年月附もたしかでは無いが、句は菊丈評や桃人評よりも、はるかに勝ぐれて居る。

けつかうなこと〜

幸々評の萬句合